
紺青の武器使い

s u d o u

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紺青の武器使い

【Nコード】

N9988S

【作者名】

s u d o u

【あらすじ】

この作品は友人のSの作品です
Sが投稿することができないので自分が投稿することにしました
自分も名前を変えて作品を投稿しますが、自分はこっちの方が好きです

2週間に一回、日曜更新の予定

第一話（前書き）

主人公の名前は橘 修

仮想体名はネイビー・ランサー

原作軸は一卷の約2年半前だそうです

第一話

ここは加速世界

日本中のソーシャルカメラによって構成られた世界だ

この世界で人々は自分の仮想体を使い日や戦いを繰り広げている

「クソ、また負けた」

シウウの仮想体は仰向けで大の字になっ力無く倒れていた
ランサーの体力ゲージはもうレッドラインギリギリで剣先を突き付けられている

「やっとお前に勝ち越せたな」

その隣で誇らしげにそんなセリフをはいている青い仮想体がもうひとつ。

「つーかその剣強すぎだろ！！　一発当たっただけで体力半分近く持つていくとかあり得ねーだろ！

仮にもこっちは緑に次ぐ防御力を持った青のアバターだぞ！」

「ハハハ。武器のおかげでもあるのは事実だがそれだけが勝敗を分けた訳ではないだろう？」

実際お前だって普段ゆり動きに無駄があっただっていうのもあったぜ？」

「そんなヤバイ武器振り回されたら避けるのに必死になるのも当然だろ、ナイト」

ナイトと呼ばれた仮想体の正確な名前はブルー・ナイト

この加速世界で最も強いアバターの一人として有名なとびきりの強者だ

現在はレベル8で、一番最初にレベル9に到達するバーストリンカーではないかと言われている

近接型のハイリンカー同士ということもあり彼とはちよくちよく戦いを挑んでいる

ブルー・ナイトとの勝率は今までは五分五分だった

ブルー・ナイトがああ剣を手に入れてからもしばらくはその力関係は続いたのだがどうやらああ剣を使いこなすために相当の努力をしたようだ

おかげで今では完全に力に差がついてしまっている

「しかし『ジ・インパルス』か。よくまあそんな武器を手に入れたもんだな」

ジ・インパルス

それがブルー・ナイトが手にしている武器の名前であり恐らく加速世界にも七つしか存在しないと言われている七つの神器の一つである

セブンアークス

「俺自身ダンジョンの最深部でこれを見つけたときは衝撃で体の震えが止まらなかったくらいだ」

とブルー・ナイトは笑いながら答えた

「その話はこの前お前にいやという程聞いたよ」

そんな話をしてるうちにタイムが残り60秒を切った

「で、もう一戦やるかい？」

「今日はもういいや。このあとエネミー狩りしたいし」

「お、ランサー、エネミー狩り行くのか。俺も行こうかな」

「いや、今日はソロで狩りにいくからいい」

「んじゃまた明日」

「じゃあなランサー」

ナイトが言うと同時にタイムアップ。それとともに【YOU LOSE】の文字が現れネイビー・ランサーは加速世界から一時退場する

加速世界から自分の部屋に帰ってかたシュウだが

一息つく間もなく

「アンリミテッド・バースト！」という掛け声と共に再び加速世界へ足を踏み入れる

最もさつきまでは通常の対戦フィールドだが今回ののは無制限中立フィールドでありこちらこそが加速世界の真の戦場である

フィールド内をしばらく進んでいくとジャングルのようなエリアがあった。現実世界なら自然公園がある辺りだがこちらの世界では完全にジャングルになっているらしく明らかに元あったであろう自然公園より巨大だ

このエリアには手強いエネミーが大量にひしめいていることで有名だ

「さて、行きますか」

と気合いを入れて中に足を踏み入れた

中で何体かの小型エネミーを倒しながら先へ進む

彼の標的はこのジャングルの奥地にいるエネミーで並のバーストリンカーならならチームを組んで伐するような敵である

（まあこんどはナイト誘ってここのヌシでも倒すか）

とも考えているがそのナイトに連敗してるせいでいまはそういう気分では無かった

（とりあえずあとで対ナイト戦の戦術を練り直さなきゃな

…このまま負け続けるのは御免だし）

そんな事を考えていると目的の敵と遭遇した。全長10m強の人型だ。ゴリラかなんかをモデルにしているのだろうか全体的に図太い

「グオオオオオオオ！！！」

どうやらこちらの存在に気付いたらしく雄叫びをあげて襲いかかってきた

「さてと…」

エネミーが拳をランサーへと振り下ろす

「フン！」

ランサーは拳を横つ飛びでかわしそのまま脇の下を潜りエネミーの後ろへと抜けていく

瞬間拳は地面をたたきズウウウンという低い振動音と共に大地が揺れる

「強化外装 フレイ・ランス！」

叫んだと同時に彼の目の前に全長2m強の巨大なランスが出現した彼はそれを片手でキャッチするとエネミーの足に突き刺した

「グアアアア！！」

エネミーが悲鳴を上げ暴れまわる

今振り回している巨大な腕にまともに当たれば一撃で体力の大半を持って行く程の威力があるがランサーには当たらない

エネミーによるパンチやキックといった攻撃を横へ飛んで避けると返す刀で降り下ろした腕や軸足にランスを突き刺していきながら先程の事を思い出す

（俺にもあれほどの武器があればアイツに追いつけるのだろうか）

そんなことを思いながらチラリと必殺ゲージを見ると十分に貯まっている

（べつに今の武器が気にいらない訳じゃない）

跳躍。一回の跳躍で彼は30m以上跳んだ。

これが彼のLv2必殺技『ハイジャンプ』である。

（だが俺は）

それでも最強の武器が欲しい

そのまま槍を下に向けて急降下する

グシャアアア

という音を立て槍はエネミーの脳天に直撃した
直後エネミーは体が爆散し、死亡した

「ま、こんなものかなー」

言いながらも考える

（ハアレベル8にもなってなに考えてるんだか
負けたのを武器のせいにするっての）

べつに神器を持ったからアイツは強くなった訳じゃない
仮にアイツが神器を持っていなかったとしても今のおれでは勝てる
気がしない

だが一人のバーストリンカーとして、いや、一人のゲームプレイヤー
ーとして

最強の武器を追い求めるのはごく自然なことじゃないか

自分の思考を少しでも正当化しながら、ランサーはそのままジャン
グルを後にしよとした

しかしその時、

空の色が変わる

「変遷か。それにしても……」

不気味な色だった

赤を基調としたオーロラ。しかしそこに紫や黒などが混ざり ひたすら不気味な色合いになっていた

しかし異変はそれだけにとどまらなかった。突然シュウの真下の地面が裂けた。地割れのような割れ方ではなくまるで空間が破けたような異様な光景だった

「！！」

オーロラに気を取られたせいで異変に気付くのが遅れた

（オイこれマジでヤバいんじゃない……！）

そのままジャベリンは裂け目に飲み込まれるように落下した

.....

目を覚ましたとき最初にみたものは天井。ただし30m以上上にあつた

どれぐらいだったのか分からないがどうやら少しの間気絶していたようだ

未だ状況が理解できずフラフラと立ち上がる

そして目の前に何かがある事に気付いたそこにはふわふわ浮いてい

る黒い球体がひとつ

「なんだ……コレ……」

ゆっくり視線を下に下ろすと球体の下に下に台座があった
そして台座には一つの単語が書かれていた

【The avatar】

と

第一話（後書き）

感想くれると友人も喜ぶと思います

第二話

「ジ・アバター……」

台座に刻まれた文字をは確かにそう書いてある

（確かナイトの手に入れた剣もこんな台座に乗っていたと言ってたな……）

しかしこれは強化外装なのか？

自分がこの加速世界に入ってからずいぶん経つがここまで不可解な物は見たことがない

（どうしたものか……）

恐らくあれに触れることで入手できるのだろうが怪しすぎる

そしてあの台座が脱出用ポータルなのだろう

強化外装を入手する事でポータルが起動する仕組みだ

シュウは上を見上げる。確かに上から落ちてきたのだが裂け目は既に閉じているらしい

（結局この空間から脱出するにはあのポータルを使うしか無いみたいだな）

シュウは少し考えた後黒い球体に触れた

【YOU GOD ANHANCED ARMAMENT《THE AVATAR》】

そんなシステムメッセージと共に黒い球体が粒子状になって消滅する

と同時にポータルが起動しブルー・ランサーの体を光が包む

気付くとシュウは自分の部屋にいた

「帰ってこれたのか……」

安堵で思わずそんな言葉が漏れる

（今日は疲れた…）

その日はそのまま疲労でまだ7時にも関わらず寝てしまった

翌日

アイテムストレージを確認してみる

手に入れた強化外装がある

そもそもあれが強化外装なのかも怪しいがアイテムストレージに移動したあたりとりあえず強化外装とみて間違いないだろう

（一体どんな強化外装なのかわからんがとりあえず今度の対戦で使ってみるか）

怪しさ半分期待半分といったかんじだった

「バーストリンクー!!」

バシイイッ!!

という聞き慣れた音とともに世界が青く染まる

そしてシュウはマツチングリストを確認して《ブルー・ナイト》の文字を発見

「お、いたいた」

シユウは迷わず対戦を申し込んだ。

【FIGHT!!】

という炎の文字と共に対戦がスタートする。

「また今日も挑戦してきたか」

開幕直後ブルー・ナイトが口を開いた

「今日こそ倒してやるから覚悟しておけ!!」
ネイビー・ランサーが答える

「俺の新しい力を見せてやる!」
ビシィ! という音が聞こえそうな勢いでブルー・ナイトを指差す

「む、ひょっとして昨日のエネミー狩りで何か手に入れたのか?」

「そんな感じだ
いくぞ!

強化外装ジ・アバター!!」

強化外装の名を叫んだ瞬間瞬間の目の前に黒い球体が出現する

「...それはなんだ?」

「分からん!

だが何か凄い力があるに違い無い！」

「根拠は？」

「いやこの見た目的に確実になんかあるだろ」

「つまり無いと」

ブルー・ナイトが呆れ顔で呟く

「さあ今こそその力を解き放て」
と中二病のような台詞を吐くが

「……………」

「……………」

しゅん

「…………そろそろ斬っていいか？」

ブルー・ナイトが加速世界に七つしか存在しないといわれる神器を
振り上げる

「まで、もう少しだけ、もう少しだけ待ってくれー！」

「断る」

即答だった

「クソ、こうなっならいつも通りランス出して戦ってやる！」

「強化外装フレイ・ランス!!」

虚空から巨大なランスが出現。

ネイビー・ランサーはランスを掴むとブルー・ナイト目掛けて突進
しかしブルー・ナイトは僅かに横にずれてこのファーストアタック
を回避

直後ブルー・ナイトは突進してきたネイビー・ランサーに剣を降り
下ろす

「ッ!!」

咄嗟にバックステップでその攻撃から逃れる

直後ブルー・ナイトはバックステップにより引き離れた距離を一瞬
で詰めると

ネイビー・ランサーに斬りかかる

しかしネイビー・ランサーはランスの根元で攻撃をうけ流す

ガッキイイイイ

という音と共にランスが弾かれる

（クッソやっぱり神器持ちのナイト相手じゃパワーで勝てねえ）

そこからはひたすらランスと剣による乱激戦が繰り広げられた

ネイビー・ランサーはブルー・ナイトと同じ純粋な近接戦闘型。彼

がパワーで勝てなかった相手は神器を手にしたブルー・ナイトが初めてだった

そもそもブルー・ナイトは剣術による技術、ネイビー・ランサーは圧倒的なパワーで戦うタイプだったので自分の持ち味であったパワーで勝てない時点で勝利することはほとんど不可能に近かった

それでもシュウは諦めずに戦い続ける

がブルー・ナイトの攻撃は重く、そして速かった

ネイビー・ランサーのほうは少しずつペースを乱されやがて剣による攻撃が容赦なく襲いかかる

一撃一撃は直撃は避けているものの腕や体を掠める斬撃により体力が確実に削られていく

（チクショウ！！確かに経験に差があるのは認めるけどいくらなんでも理不尽だろ！！）

心の中で叫び声を上げるシュウだったが 攻撃を凌ぐのにあまりにも必死になっていた彼は気付くのが遅れた

ブルー・ナイトの必殺技ゲージが減っていくことに

「必殺

」

（しまっ ー！！）

ブルー・ナイトの必殺コマンドが唱えきる前に回避行動に出ようとしたが遅かった

ヒュン

と空気を裂くような音が聞こえたと思った時にはネイビー・ランサーは右肩の辺りを縦に引き裂かれた

(……っ!!)

右肩のあたりから猛烈な痛みが込み上げて右腕の力が抜けていき、ガシャンといい音を立てて握っていたランスを落とした

乱激戦で半分近くまで減っていた体力ゲージは一気に一割近くまで削られる

「そろそろ終わりだな」

(あいかわらず強えーな……)

まだ実力がたりないのかよ……)

俺にもっと力があれば……

そう思いながらも自分はまだ戦えると体に言い聞かせ体制を立て直すとする

と、不意に左手が何かに触れる

(ん？これは……)

出したまま放置してあった黒い球体だった

と、今まで何の変化も見せなかった球体がいきなり形を崩した
「「!!」」

球体はやがて形を整え最終的に一振りの漆黒の大剣に変わった

第二話（後書き）

感想待ってます

第三話

<（大剣？）

シュウはいきなり形を変えた元々球体だった物が形を変えたことに戸惑いながらも、その大剣を手にとってみる

ズシリとした重量を感じた

（剣にしては重いな

ランスほどじゃねえけど

しかしそれ以上に……）

それ以上にその剣から発せられる威圧感の方が異常だった

一種の情報圧とでも言うべきか

それがブルー・ナイトの持つ神器、《ジ・インパルス》以上の力を発している

「おい、何なんだよそれ!？」

その威圧感を感じたのかブルー・ナイトが叫び声を上げる

「俺にもわかるか!!」

シュウも叫び返した

「だが…

コイツが何だか分かんねえが…

おかげでおれはまだ戦えそうだぜ！」

「……相変わらずの戦闘バカだな……」

いいだろう

…来い！！」

体力が瀕死状態だろうが腕一本取れようが、力尽きるまで戦う、諦めの悪い人間が橘修という人柄だったりする
まして今まさに新たな武器を手にした彼が止まるはずがなかった

「ハアアアアア！！」

ネイビー・ランサーはブルー・ナイト目掛けて突撃する

「チッ！」

ブルーナイトは神器で応戦する

ガッキイイイイ！！

「なっ……」

今まで絶対的な力を誇っていたブルー・ナイトの剣が一方的に弾かれる

（なんだこの威力！？）

あの強化外装、神器級か！？）

ブルー・ナイトは後ろに飛び即座にネイビー・ランサーとの距離をとる

（今のあいつにパワーじゃ勝てない。ここは一旦体制を立て直してから剣術で……）

そんな思考をしているうちに

剣を構えたネイビー・ランサーの姿がブレる

「！？」

（奴は必殺技を使い切った直後。
そして俺は……）

シウウは満タン近くまで溜まった自分の必殺技ゲージをチラリと確認してニヤリとする

勝てる！！

ネイビー・ランサーは一瞬で距離を詰め叫ぶ

「必殺、ルイン・クラッシュ重撃破壊！！」

繰り出される攻撃は単純な斬撃。

ブルー・ナイトは剣で振り下ろされる一撃を受け止めようとした

が、

ネイビー・ランサーの攻撃を受けたブルー・ナイトの神器がへし折れた

「え？」

気の抜けたような声を出した瞬間ブルー・ナイトの体が縦に真つ二つを切断され仮想体が爆散した

【YOU WIN】

という炎文字と共に現実世界に帰還する

「勝っちゃったよ……」

シュウは帰ってすぐにポツリと洩らす。

（いや、つーかなんだあの威力！？
アイツの神器折れたぞ！！）

まあ強化外装が壊れても戦いが終われば 復活するわけだが……

だが神器が壊れたのは紛れもない事実である

（確かに俺の必殺技『重撃破壊』は武器による攻撃力を3倍に引き上げ、さらに強化外装やオブジェクトに対してはさらに追加で1・5倍の破壊力を発揮する能力を持つてるけどそれでも神器を破壊す

るだけの力はないはずなんだが……)

やっぱあの正体不明の黒い体剣(元黒い球体)が要因だよなー

と少し思考して

(結局俺じゃあの強化外装について分からんしな。明日にでも知ってそうな奴探すかな)

などと自己完結しかけたところで

「なんならボクが教えてあげようか？」

という少女の声が頭の中に響いた

「へ？」

咄嗟に辺りを見回すが誰もいない

というか親が仕事の都合上ほとんど家に帰ってこないため、晩飯前だが家には誰もいないはずだ

(となると)

シウは自分のニューロリンカーを確認する

しかし通話状態になっているわけでもなくそれ以外の音声を伴うような機能も使っていない。

(幻聴が聞こえてくるとは……疲れてんのかな。

とりあえず飯食ったらさっさと寝よう)

「いやーそんなに探してもボクの姿を確認する事はできないよ」

「……っ!」

試しにニューロリンカーで思考発声を試してみる

「…誰だ？」

「フフ、今はボクの事よりも強化外装『ジ・アバター』について知りたいんじゃないの？」

今からキミに教えてあげるよ
その強化外装について」

……きちんと答えが返ってくるあたりただの幻聴では無いらしい

「いやいや、今のこの状況の方が気になるんだが…

一体何がどうなっているんだ？」

「しょうがないなー
じゃあそっちから説明してあげるよ」

以外にも正体不明の少女はあっさりとこちらの質問に答えてくれる
ようだ

「まずボクの正体はわかるかい？」
と少女が質問する

「それが分からないから聞いているんだ」
シュウはやや怪訝な表情で答える

「いやゝ何となく分かるでしょ」

……どうやらコイツは人を茶化したりするのが好きらしい

「やはりあの強化外装しか思い浮かばないな」

「あつたりゝ！」

ワーパチパチ

と声で表現する少女

「まさか本当にあの強化外装に意思があるとても？

そもそも今はダイブすらしてないんだぞ！？」

つまりそれは加速世界の中のみならず現実世界ですら干渉している
という事にならないか

「ありえない……」

「しかしあり得てしまっただよねゝ」

厳密にはこの強化外装の使用者を補助するためのAIなんだけどね」

「……」

確かに自分の意思を持ち、自分で考える知性を持った自立型のAI
は今から20年前には存在していた

が、なぜ自立型のAI を強化外装に取り入れる必要性があったの
だろうか

という考えを読んだのかA Iご本人が答えてくれた

「この強化外装はちちょつと特殊でね、強化外装『ジ・アバター』
についての説明と補助をするために取り入れられたんだよ。」

まあボクの存在理由から説明しなくちゃいけなくなってしまったの
は二度手間だと思うんだけどね」

「強化外装と一緒に取り扱い説明書でも添えてくれれば済む話じゃないのか？」

「それだけじゃ駄目だったんだよ。
限りなく人間に近い思考パターンをもつA Iが必要だったんだよ」

……何故なのだろうか、という疑問が湧いたが、それ以前に最初から
気になっていた素朴な疑問が一つ

「とこでさ、さっきから気になっていたんだけど、声から判断する
に女性だよな？」

「そうだけど？」

あ、ひょっとしてキミ、脳内に彼女ができたのそんなに嬉しかった
？」

…… 顔を伺えたらなさぞかしニヤニヤしていることだろう

「ちげえよ！！」

なんだその末期患者みたいな扱い！！」

シユウは全力でツツコミながらも話を続ける

「そうじゃなくて…
なんで女性なのに一人称が『私』じゃなくて『僕』なんだって話だ。
開発者の趣味か？」

「いや、これはAIのモデルになった人の一人称が『ボク』だった
っただけだよ。
というかもっと重要なことを聞きたかったんじゃないの？」

「実際にはわざわざAIを用意した理由について聞きたいんだが…」

「じゃ、そろそろ『ジ・アバター』のスペック説明に入ろうか。
その質問にも答えられるし」

しかし思考パターンを人間に近づけるためにわざわざ人間から脳の
データを採取したのだろうか

完全自立型のAIがどうやって作られたのかは自分では全く想像の
できない領域のもので、

（思考スピードを1000倍加速するシステムといい、ディテール
に極限まで拘ったステージといい人間に限りなく近いAIといい一
体ブレイン・バーストというゲームは一体どれほどの技術が投入さ
れているのだろうか）

と思っただが、考えるだけ無駄というものだろうと諦め、少女の話を
聞くことにするのだった

第三話（後書き）

は友人Sが送ってきたあとかき？です

ジ・アバターが荘厳な雰囲気強化外装だと思っていた方、申し訳ありません！！

中身は可愛い女の子（しかもボクっ娘）です！！

らしいです。感想待ってるらしいですよ？

第四話

「加速世界には得体の知れないシステムがゴロゴロしてるってことだよ」

（得体の知れないシステムね…）

自分の知り得る限りではその最たる物が心意システムだろう

心意システムが見つかったのはそう昔のことではない
しかしその余りの性能にあらゆるバーストリンカーが魅せられたが
現在は使用を封印しようという発言もされている
それくらい禁断とっていい力だった

「まあ心意システムとはまた違ったシステムなんだけどね」

「どうやって心の中のセリフにまで反応してんだよ…」

ポツリとシュウが漏らすとパティから返事が

「どうやらジ・アバターを強化外装として出した時点でキミとボクにはかなり深い精神的な繋がりができたらしいね。

だからキミが考えていることもだいたいボクには分かるってこと」

「ちゃんとした理由あったのかよ……」

「つかないにそれ怖い」

「ま、そんな訳だからわざわざ思考発声なんてする必要はないよ」

「それじゃあ自分の中で考えてることとお前に向かって話してる」ととの区別がつかないだろ…」

「ボクはそんなことどうでもいいんだけど」

「俺にとってはどうでもよくはないんだよ」

「考えてること……」

とシュウが言おうとして

「『……考えてることと話してることの区別ができないと頭がこんがらがる』でしょ」

パティが自分が今言おうとしていた事を全部言ってしまった

「ウゼエー!!」

というかいちいち心の中読むなよ!!」

とシュウは思考発声で叫ぶが

「ハイハイ」

とりあえずキミの言い分はわかったよ」

パティに軽く聞き流された

「…ああもう思考発声について分かってもらえたならいいや

じゃあ次はスペック面について教えてもらおうかアバター君」

「…ボクにも『パティ・』というきちんとしたアバター名があるんだけど」

少女、改め『パティ』がムスツとしたように言う

「ああ、そんな名前があったのか」

「キャパシティ・サポーター・システム 実名は『能力補助体』とかいう面倒な名前がついていたけど自分で略してみた」

「『キャパシティ』から文字取っただけかい！

『サポーター』と『システム』の方にも触れてやれよ…」

「それより本題」

『サポーター』と『システム』から名前取ってない時点で略称とは呼べないんじゃない、と思たが本題の方が重要なので口には出さない

「簡単に説明すると『ジ・アバター』は使用者の意思で自由な形状にする事ができる強化外装なの」

「マジかよ…」

シュウはいきなり述べられたジ・アバターのトンデモ性能に唖然とする

（だがあのときは大剣のイメージなんてしてないんだが…）
と思っっていたらまた心を読んだのかパティから答えが返ってくる

「さつきも言った通りこの強化外装は封印状態から解いた時点で所有者と精神的な繋がりができるの」

あのかきはボクがキミの深層心理を読み取ってそのデータを『ジ・アバター』が読み取って大剣として変形させたんだよ」

「じゃああのかきは俺が剣という武器をを望んでいたと？」

「そうなるね。」

まあ剣は純粋な攻撃性の具現だからあのかきの時にはぴったりだったんじゃないかな」

「まあ相手の神器が剣だったから張り合ったただけだと思っただけだな」

ハキハキ説明するパティに対してシュウは嘆息して答えた

「それと性能も思い通りにできんのか？」

「そこまで万能じゃないよ。」

能力は使用者の深層心理によって決定されるよ。

ただそれにも限界は存在するらしいね。

たとえば必殺技や心意でもないのに剣を振っただけでそこから衝撃波が飛ばしたりなんてことはできないよ」

と残念そうに言うパティ

「まあそれでも神器破壊した時点でまともな武器ではないんだと思うんだが…」

「実際まともな武器じゃないんだよね。」

これは失敗作なんだよ…」

軽い調子で話していたパティは心なしかここだけ悲しそうに言う

「…どういう事だよ？」

あれだけの性能を持っていながら失敗作？

「それについては話す時が来たらいずれ話すよ」

今は話してくれそうにないな

と思ったので話題を変える

「で性能はそれで全部？」

「まだもう一つあるよ」

と明るい声に戻ったパティが答える

「ジ・アバターには使用者の身体能力を強化する力がある。

キミもジ・アバターを使った時に感じたはずだよ」

「……」

シュウはブルー・ナイトとの戦いを思い出していた

激しい戦いで体がボロボロだったのにも関わらず目が霞むほどの速度で移動できた事

左手で武器を握っていたにも関わらず叩き出せた力

あれを万全状態で振るったら一体どうなるのか

「……本当にまともな武器じゃねえな」

少なくとも普通の対戦で振るような力じゃない

「…封印しようかね」

封印といっても使わないだけだが

「使わなかったらまたあの青騎士に負けるんじゃないの？」
と意地悪く聞いてくるパティ

「なら俺が強くなればいい話だ」

「そ。じゃあボクはまた眠りにつくから使いたくなったら呼んでね」

バイビー

という言葉を最後に声は聞こえなくなった

強化外装の事とかそれに取り憑いたアバターとかいろいろ思う事はあつたが

「……早く飯食お」

と言ってリビングに行くシュウであつた

しかしシュウはこの翌日にこの強化外装使うことになる

第四話（後書き）

おまけ&解説 （メタ発言注意）

シュウ「今回からはおまけのコーナーがはいるぞ。さて俺がこの物語の主人公にしてこのコーナーの進行である橘修だ。それと」

パティ「ゲストのパティです！」

シュウ「基本俺以外は適当にメンツを変えていく予定だ」

パティ「それよりも今回の話会話だけで終了って絶対おかしいよね」
シュウ「ジ・アバターについての説明が余りにもグダグダになってしまった結果だな。
これだから文才のない作者は」

パティ「ええと、とりあえず解説入らない？」

シュウ「ああ、今回は一話からまとめて解説しなければならんのか。全く本文だけで済ませられないものかね」

パティ「あの作者じゃ無理でしょ」

シュウ「さて、第一話のブルー・ナイトに関してだが原作には詳しい事は載っていなかったので勝手に神器の入手時期とかを決定してしまった。

申し訳ない」

パーティ「で、ブルーナイトの神器入手時期っていつ頃」

シュウ「ブルーナイトがレベル8の頃に手に入れた設定だ。

あとジ・アバター手に入れた俺とブルー・ナイトが戦った時もまだブルー・ナイトのレベルは8のままだ」

パーティ「『実際はレベル9になってから手に入れた』とかだったら設定的に終わるよね」

シュウ「その時は『二次創作だから』としか言い様がないな」

パーティ「それであとは？」

シュウ「ジ・アバターの元ネタについて」

パーティ「フムフム、何かな」

シュウ「遊戯王です」

パーティ「え、あ、うん…」

だいたい予想はできてたよ」

シュウ「性能まで同じようなものにしようとしていたらしい」

パーティ「……………」

シュウ「次行くか。」

今度はジ・アバターの性格についてだ」

パティ「ジ・アバターというかボクの事でしょ」

シュウ「最初は所有者の性格、つまり俺と同じ性格それと同じ声にするつもりだったらしい」

パティ「なんで変えたんだろ？」

シュウ「それは作者に聞いてないから分からない。
まあなにか意味があるんじゃないかと」

パティ「ただの作者の趣味かもねー」

シュウ「まあこれについてはかなり迷ったらしい。
ーから書き直そうかと思うくらいに」

パティ「ええと、もしも書き直した場合ボクは？」

シュウ「この世から消える」

パティ「！？」

ちちちよつと待つてよ！

今更書き直しなんて認めない！！
認めて… たまるか…」

シュウ「多分そんな面倒なことはいっしょ」

パティ「(ホッ)」

次はちゃんとアクション起こしてくれるのかな」

シュウ「気を取り戻したか。

ジ・アバターの説明もあらかた済んだし大丈夫だと思っけどな」

パティ「じゃ、また次回」

第五話

謎の強化外装に取り憑いたA Iとの会話という不可思議極まる行為をやった翌日

（あーやつば夢とかじゃないよなー）

とか思いながらアイテムストレージにある強化外装『ジ・アバター』の文字を眺めるシユウ

今日はブルー・ナイトとエネミー狩りをする約束になっている
とりあえず昨日の件についてはブルー・ナイトには散々聞かれる事になるよな

とか思いながら時計を確認。時刻は午後7時5秒前。

4、3、2…

1秒前に息を吸い、

「アンリミテッド・バースト！」

の掛け声と共にレベル8アバター、『ネイビー・ランサー』として
無制限フィールドに降り立つ

ブルー・ナイトの姿はまだないようだ

（午後7時ジャスト

…つつても流石に半秒くらいの差はあるよな）

と考え暇潰し兼エネミー狩りの下準備として周りのオブジェクトを
拳で破壊していく

ややあつて、ガシャンガシャンと鎧が擦れる音が聞こえてきたので振り返るとブルー・ナイトの姿があつた

そしてこちらが返事をするまでもなく

「おい、昨日使った強化外装なんなんだよ!」
と問い詰められた

「いきなりかよ…」

ナイトのやつになんて説明しようかなー
めんどくさいなーとか思ったので

「昨日分からなと言ったはずだぞ。
今日の俺は知ってると思つていたのか?」

と適当にあしらう事にした。

普通は正体不明の強化外装の事を翌日には理解してる、なんて事はあり得ない。

…普通ならな

と、

「我らが主に対してなんだその口は!」

「日頃親しい仲とて礼儀をわきまえよ!」

と叫ぶ声が二つ

ブルー・ナイトの両サイドに刀を差した青い仮想体が二つあつた

「お前らいたのか…」

シュウがうんざりした声を出す

マンガン・ブレードとコバルト・ブレード

青の王ことブルー・ナイトの側近であり、かなりの手練れである

が、現在はシュウにからかわれている

「「最初からいたわ!!」」

「いいシンクロだ」

うんうん、といった感じでうなづくネイビー・ランサー

「貴様……!」

「我が主の誘いを断るばかりかここまでコケにするとは……」

何か二人の体がワナワナ震えている。

ついでにいうと片手が刀の仕に伸びている

「ちよつ、ストップストップ!!」

今日の目的はエネミー狩りだろうが!」

「……楽しそうだなお前ら」

ブルー・ナイトがやれやれ、と首を横に振っている

「それはそうと本当に俺のレギオンに入る気はないのか?」

俺は対戦やエネミー狩りなどでかなりの頻度でブルー・ナイトと関

わっている

まあお互いに近接戦闘型であるということと意気投合した結果なんだが

「あんまし一つの組織に縛られたくないのでな」

「相変わらず七大レギオンの領土に入っては戦闘を繰り返してるのか」

ブルー・ナイトが呆れたように言う

ネイビー・ランサー は誰の領土だろうと構わず侵入し、そのたびに領土内のハイリンカー相手に対戦を吹っ掛ける、といった無茶苦茶なバーストリンカーだったりする

「まあね。

やはりもつと自由に対戦をするべきだよ。

ま、そんな事よりエネミー狩りしようぜ」

よし、コイツら完全に昨日の強化外装のこと忘れてるな、と内心でガッツポーズを決めていたシュウだったが、

「ところで強化外装の件についてなんだが」

ギクウ！！

「エネミーはあっちか！」

ダッ！

もう一度見せてくれないか、と言う間もなく、
ネイビー・ランサーは叫んで全力で走りだした。

「逃げやがったな……」

「どうします？」

コバルトが尋ねる

「方向が今日向かうべきポイントと方向が逆なんだが…

とりあえずそのうち気づくだろう

戻ってきたところを捕まえて問い詰めればいい」

とブルー・ナイトはに答えると同時に考える

あの拳動からしてネイビー・ランサーが何かを知っているのはほぼ
確実だった

（しかしランサーの奴がああまでして語るのを拒むとは…）

昨日見たあの強化外装が余計に不気味に感じられた

「ぜえ…ぜえ

…ずいぶんと…走っちゃまった…」

「どうしてそうまでして逃げるかな？」

突然少女の声が頭の中に直接響いた

「ああ、パティか。」

次に使う時まで寝てるとか言っただけだったか？」

「いやあ、バースト・リンクしてたみたいだから気まぐれで起きてみたらかな面白そうな状況になっていたからね」
それより一から説明してやればいいのになんで逃げたのか聞きたいな」

相変わらず調子のいい声をだしているパティ

「ああ、それはだな……」
と言いかけてふと思う

（この状況誰かに見られたら俺ただ一人で喋ってる痛い人なんじゃ……）

と思いつつと冷や汗をかく

周りに人は居ないがナイトと側近二人あたりが追いかけてくる可能性もある

そんな事を考え、言葉ではなく思考で話す事にした

加速状態では思考音声を使うことは出来ないが、パティは俺の思考を読めるようなので、思考音声をだすイメージで思考する

「で、話さなかった理由については説明が面倒くさかったのとお前の存在を話す訳にはいかなかった、という二つの理由がある」

ネイビー・ランサーは歩きながら言う

「ふん。

まキミの心を読めばだいたい考えてることは分かるけどあえて尋ねるとしようかな

もつとキミと人間らしくコミュニケーションをとってみたいし

で前者の理由はともかく後者の理由について詳しく教えてくれないかな」

言葉による会話から思考による会話に切り替えたがパーティは特に気にしていないようだ

「昨日は心の中のセリフ読んでたのにホント気まぐれな奴だな」

と若干皮肉気味に言ってみる

「まあね。

といか今もキミの思考を読み取りながら会話してる訳だけど」

「要は意識の違いだ。

分かって言ってるだろ」

シュウは面倒くさそうに言い放ってから質問に答える

「後者についてはだな……もしも俺がナイトに対して『じつは頭の中で少女の声が聞こえるんだ』って言ったらアイツ、どう思う?」

「……末期だね」

パーティがぼつりと言う

「間違いなくそんなこと言うだろうな」

「という訳で今のところ『ジ・アバター』についてアイツの納得するような性能を考える時間を稼ぐ為にこうして逃げてる訳だが」

「少し面倒でも性能については全部話してボクのことには触れなければいいんじゃない?」

「でも神器を破壊する程の威力についてもいろいろ聞かれそうだな…」

「うゝんそうだね、それじゃあ……………」

そんなこんなで

『強化外装ジ・アバターは自由な形にできると同時に強化外装に対して絶対的な破壊力がある武器。』（44字。句読点含む）

という形でまとまったところで帰ろうとしたが…

「……どこだ?」

さっきまでは鉄塔が並ぶエリアにいたはずなのに気付いたら鉄塔の

かわりに巨大な岩がゴツゴツある場所にきてしまっていた

完全な迷子である

「考え事しながら歩くからこういう事になるんだよ

というより…フフ…ハイリンカー様が迷子って…フフフ…どういうことなのかな…アハハハハハ！！」

AIに爆笑された……

「う、うつせえ！

この辺のエリアには最近は全く入ってなかったんだよ！」

「とりあえず位置情報がわかればどうにでもなるんだけど」
一応このエリアには見覚えがある

問題は周りに目印となるような物がないうえ巨大な岩などが目の前に来ると無意識に曲がりながら歩いてきたため自分がどの方角から来たのが分からなくなってしまった事だ

どうしたものか……

と思っていると遠くの方に仮想体の影が2つ見える。

（ラッキー！

あそこの人に聞けばいいや）

「まったくレベル8にもなってまさか人に道を尋ねるハメになね…プププ」

パーティが笑いをこらえながら言う

そんな心底楽しそうに話すパーティを無視

（ハア、それにしてもナイトの奴怒ってるだろうな）

と思いながら人影に近づいていくと徐々に人影の姿がはっきりとしてくる

片方は女性型アバター。

色は青を基調とした仮想体だ

だがその仮想体は倒れこんでいた

（対戦中…なのかな？）

しかしもう一つの仮想体を見た瞬間、それが「対戦」などという甘いものではなかったことを知る

色は限りなく黒に近いグレー、右手に斧をもっている

そしてその仮想体は口で何かをくわえていた。

その「何か」は女性型アバターと同じ青い色をしていた。

再び青い仮想体の方を見る。

フルフェイスのヘルメットにはヒビが入り体もボロボロだった。そして何よりその仮想体には片足が膝から先がなくなっていた

黒い仮想体がくわえ込んでいるものが彼女の「足」だった。

（いや、あれはくわえてる訳じゃなくて…
喰ってやがる…）

青の仮想体の片足を咀嚼し終えた黒の仮想体はボロボロの青の仮想体に対してこう呟いていた。

「喰ワレロ、

喰ワレテ肉ニナレ」

第五話（後書き）

おまけコーナー （メタ発言注意）

シュウ「今回もおまけを始めるぞ。」

パティ「おー」

シュウ「相変わらずノリがいいな

あと今日は原作キャラからゲストを呼んでおいた。」

ハルユキ「あ、有田春雪です

よ、よろしくお願いします!」

パティ「よろしくね」

ハルユキ「よろしくお願いしますパティさん

あの…ところで修さん」

シュウ「どうした?」

ハルユキ「本編での僕の出番はいつ頃来るのでしょうか」

シュウ「え、え〜と…それはだな…」

パティ「時間軸にして原作『アクセル・ワールド』の第一巻の2年

半前からスタートしてるからずいぶん後になるね」

ハルユキ「そ、そんな……」

2年半前って……」

シュウ「いや……作者曰くある程度まで話を進めたら一巻辺りまで時間を飛ばす、みたいな事を言っていたから『ハルユキ君初登場は第三十話です』みたいな状況には流石にならないと思うが……それでも随分後になるな……」

（というかこの作品三十話まで続くのか？）」

パティ「ま、まあおまけコーナーのゲストにはちよくちよく呼ぶ事になると思うから……元気だしてよ」

ハルユキ「あ……はい」

シュウ「パティ、話題を変えるぞ」

さて、このおまけコーナーでパティが俺以外の人間と普通に喋ってるカラクリについてだが」

パティ「「了解」

今このスタジオには特殊な機械が置いてあってね、
現在その機械とシュウのニューロリンカーはワイヤレスで接続されてまっす」

シュウ「で、まあ俺の頭に直接響いてるパティの声はこの機械で音

声として出力することができんだ。（まあ声として出したくないものは出力をしなかったりできるんだが）」

ハルユキ「へ」

そんな仕掛けがあつたんですか…

やはり本編にも出す予定なんでしょうか」

シュウ「登場しないんじゃないかな。

作者としてはおまけコーナー専用のご都合アイテムだそうだ」

ハルユキ「じゃあ本編で僕がパティさんと会話することもないんですか？」

シュウ「今のところ未定らしい

作者の気が変わったら使うかもしれんし」

パティ「なんか今回はおまけの説明で終わっちゃったね…」

シュウ「誰のせいでこんなにも長々と説明していると思ってる」

パティ「作者のせいでしょ？」

シュウ「ま、まあそうだな（お前のせいだよ！

とツツコミを入れる予定だったのに否定できねえ）」

ハルユキ「ええと…そろそろ時間じゃないですか？」

シュウ「おっと、帰って日曜夜6時半からのあの番組をみなくては」

ハルユキ「そのために収録時間を午後5時半にしてたんですか？」

シュウ「まあな

ちなみにひとつ前の番組も楽しみにしてるので6時ではなく5時半にしてある」

パティ「家から30分くらいのところにスタジオあるもんね」

ハルユキ「あの……

《加速》しながら収録すればいいのでは？」

シュウ「原則的には収録はリアルで行うことにしてるんだよ
やはりこういうのはリアルで面と向かってやらなくては」

パティ「ボクが存在完全に否定してない？」

シュウ「また次回」

パティ「ちよつと、

打ち切らないでー」

ハルユキ「ハハハ…（この2人仲いいな）」

第六話

朝倉弓はバーストリンカーになってから3ヶ月の月日が経っていた。あさくら ゆみ

そして最近ついにレベル4に上がったのであった。

そんな彼女の最近の楽しみはようやく行けるようになった無制限中立フィールドに赴く事である。

（まだ晩ご飯まで時間あるし無制限フィールドに行こうかな）

無制限フィールドの魅力は一般の対戦フィールドよりも自由度が高く時間にも制限がないことだ

またエネミーがうるついているのも無制限フィールドに於ける特徴だ。

中にはハイランカーすらも準備なしに出会ってしまうと適わないような強力なエネミーもいるらしいので不用意にエネミーのテリトリーには入らないように、と《親》によく言われていた

だから強力なエネミーのいる場所を避けながら小型のエネミーを狩っていたのだ。

しかし彼女は知らなかった。

この加速世界にはエネミー以外にも恐ろしい存在がいることを。

「よし快調快調！」

山下弓、この世界ではセルリアン・フィストというアバター名をもつ少女は満足げに言った。

いま彼女がいるエリアは巨大な岩がゴロゴロあるような場所だ。ここには巨大なエネミーは現れず、かわりに小型のエネミーがごろちよろしている。

この世界のエネミーは最低クラスのものでかなりの強敵なのでとてもしんどいことが多いのだが、今回は相性がよく快勝だった。

というのもここにいるエネミーは岩の影に隠れながら近づき間近で襲いかかる、といった戦法をとるため、遠距離型の赤などはかなりの苦戦を強いられるわけだが、完全な近接型である彼女にとっては大した敵ではなかった。

（あっちから近づいてくれるわ体力は低いわでホントやりやすいな）

と思っていると新たな獲物が20メートルほど前にいた。

エネミーは岩影に隠れているつもりなのだろうが……

（ここからなら見え見えなんだけど…

わたしがここにいることに気づいてるのかな）

思ったがどうやら別の敵に対して警戒しているようだ。

（わたし以外のアバターがいるのかな？）

と思ってそのエネミーを観察してみる。

（……なんだろう……）

ユミにはなんだかあのエネミーが恐れているように見えた。

と、奥の方から仮想体が姿を現した。

色は限りなく黒に近いグレー。

右手には大きな斧を握っている。

黒の仮想体は恐るべき速度でエネミーに迫る。

直後

ズゴオオオオオン

という轟音が鳴り響いた。

斧がエネミーもろとも岩を砕いた音だった。

斧が直撃した場所にはクレーターができていてそこを中心に岩全体にヒビが入っている。

エネミーの姿を確認することは出来ないが確実に死んだだろう。

（な……にが……）

ユミにはエネミーへと飛びかかる仮想体の姿がほとんど見えなかった。

黒の仮想体の姿がブレたかと思ったならエネミーの目の前で斧を降り下ろしていたのだ。

そしてその黒い仮想体はこちらに振り向いた。

「え…と…」

一体何を言えいいのかわからず言葉がつかえていた。

（と…とりあえず挨拶はしたほうがいいのか…）

などと考えていたが直後に黒の仮想体が放った一言でそんなことは不要だという事を悟った。

「…喰ワレロ」

「……っ…！」

今度こそこの仮想体がまともな存在ではないことを知ったユミは声にならな悲鳴を上げて全力で逃げだした。

（な、なんなのアイツ

本当にバーストリンカーなの！？）

「ガッ…ガガ…」

黒い仮想体はセルリアン・フィストに向かって叫ぶと猛然と襲いかかってきた

黒い仮想体は恐るべき速度でマリンの目の前まで移動し、大斧を振るった。

「あ……あ……」

気づくと自分の左腕が宙を舞っていた。

「~~~~っ!!」

直後猛烈な痛みが左肩から襲いかかってきた。

ここは無制限フィールド。

それはすなわちダメージによる痛みが2倍になる事を意味していた。

そうして痛みで悶えている内に斧が脇腹に突き刺さり、セルリアン・フィストは死んだ。

しかし無制限フィールドで死んだ者は実体を失い加速世界から去る事なくその場に留まる。

色を失ったモノトーンの世界の中でマリンは自分を殺した黒い仮想体を見た。

（な……

なんで……なんでまだいるのよ……）

黒い仮想体はセルリアン・フィストを殺しても去ろうとなしなかった。

斧の先端を地面に付けたまま佇んでいる。

そして自分の下の方に見える数字を見てユミは何故この仮想体がここから立ち去ろうとしないのかに気付いた。

無制限フィールドに於いては例え死んだとしても一時間後には蘇生される。

この数字は死亡してから蘇生されるまでの残り時間を表している。

つまりこの黒い仮想体は再びセルリアン・フィストを殺す為に彼女が蘇生されるのを待っているのだ。

それもおそらく一度ではなく自分のバーストポイントが尽きるまで何度も何度も殺され続ける。

そんな状況に彼女は逃げることも出来ずただ震えるしかなかった。

1時間後。

セルリアン・フィストは蘇生した。

と同時に全力で逃げようとしたが、

瞬間、

大斧が背中に叩きつけた。

一瞬で体力ゲージが吹き飛び、彼女の仮想体は爆散した。

セルリアン・フィストは更に黒い仮想体によって二回ほど殺された。どんなに必死に逃げようとしても彼女と黒い仮想体とはあまりにも性能が違った。

そして5回目の復活。

「う……っわあああ!!」

ユミは叫びながら黒い仮想体に向かって拳を振るった。

が、黒い仮想体は体を左にずらしてかわすと右足で蹴りをいれた。

セルリアン・フィストの体は数十メートル吹っ飛ばされ、地面に叩きつけられた

そして彼女が立ち上がるより先に急接近した黒い仮想体は 左手で彼女の右足を 掴むとそのまま引き千切った。

「ああああアアアアアアア!!」

彼女は絶叫を上げて悶えた。

黒い仮想体は千切った足をムシャムシャと食べ始めた。

（誰か……誰か助け……）

悪夢のような状況で彼女はそう願うしかなかった。

（なんでアレが……

消滅したんじゃないかったのかよ……

…クロム・ディザスター！！）

シュウは黒い仮想体を見ながら戦慄していた。

昔見た時とは違ったフォルムをしていたがあの禍々しさは間違いなくクロム・ディザスターだった。

「アバターが襲われてるけど……
とにかく助けないと」

前方広げられている惨劇を目の当たりにしてパーティが叫んだが既にシュウは行動に出ていた

「フレイ・ランス
強化外装！！」

ネイビー・ランサー目の前に巨大なランスが出現する。

シュウは……ネイビー・ランサーはそれを掴むと黒い仮想体にラン

スの先端を向けて叫んだ。

「スタブ・ゲランス
《閃光刺殺》——！」

ランスが一瞬青く輝き、超高速で黒い仮想体……クロム・ディザスターへと突撃した。

クロム・ディザスターの視界外からの超高速での攻撃。

しかしクロム・ディザスターは新たな敵を感知すると瞬時に体をスライド移動させてネイビー・ランサーの攻撃を回避したがランスは腕を掠め

ジッ

という音と共に火花によるエフェクトが発生した。

（クッソ！

完全な不意打ちだったのにそれをかわすか……
アイツ後ろに目でもついてんのか！？）

シュウは内心で毒づきながらも攻撃を続けた。

ランスを構え直し突きを連続で行った。

クロム・ディザスターはその攻撃を斧でいなし、またかわしながら距離を詰めていった。

「クソ、このバケモノめ——！」

「このアバターの事知ってるの？」

こんな状況だが構わず聞いてきたパティに対して頭の中だけで答える。

「アバターの方じゃねえ、この黒い強化外装のほうだ。

昔討伐作戦に参加したことがあるんだが

……消滅の報告は聞いたからもう二度と合わないと思っていたし、正直二度と戦いたくなかった敵だ。」

ネイビー・ランサーはパワー特化型のアバターだ。

しかしクロム・ディザスターのパワーはそれを更に上回っていた。

ネイビー・ランサーの首目掛けてクロム・ディザスターの振るった斧をランサーは後ろへ飛び回避。

しかし完全に回避する事は出来ず首筋を斧が掠めライトエフェクトと共にHPゲージが1ドットほど減少した。

しかしクロム・ディザスターは離れた距離を一瞬で詰めるとネイビー・ランサーの首を切り下とさんと斧を振り上げた。

シュウはランスで突くどこるかむしろクロム・ディザスターを迎え入れるが如くランスを左側にずらす。

クロム・ディザスターが獰猛な笑みを浮かべながら斧を振り下ろそ

うとする

刹那

「……ランスの先端部よりも内側まで距離を詰めれば安全だと思っ
てんじゃねえぞ」

左側に向けていたランスをクロム・ディザスターに向かってバットの
如く振り叫ぶ。

「必殺^{ルイン・クラッシュ}《重撃破壊》！！」

ランスの本来の用途を完全に無視した攻撃にクロム・ディザスター
は全く対処出来ず、結果横っ腹にランスが直撃し、まるでダンプカ
ーに跳ねられたようにぶっ飛んだ。

クロム・ディザスターはぶっ飛びながら 体制を立て直し、足の鉤
爪で地面を掴んだ。

「グルウォアアアア！！」

クロム・ディザスターが明らかな怒りを込めて咆哮する。

（必殺技が直撃したっていうのにケロッとしてやる）

この短時間に2回も必殺技を使ってしまった故に必殺技ゲージは既
に1割を切っていた。

クロム・ディザスターはネイビー・ランサーに向かって突き進むと
狂ったように斧を振り回してきた。

シュウもランスを剣のように振り回し応戦し、ランスと斧がぶつかりあう。

ランスと斧によるつばぜり合いという普段はお目にかかれないようなシュールな状況になっていたが、不意にクロム・ディザスターの口がぱかっと開き中から触手のような物が出てきてネイビー・ランサーの右肩に突き刺さった。

（しまっ…）

シュウが思っている内に体力ゲージがみるみる内に減っている

クロム・ディザスターの固有スキル《ドレイン》である。

相手の体力ゲージは見えないが恐らくこちらの体力が減少した分相手の体力が回復している事だろう。

「ふざ…けんなああああ!!」

シュウは自分に突き刺さっている触手を左手で掴むとそのまま引きちぎった。

「ギヤヤアアアア!!」

クロム・ディザスターが悲鳴を上げ後退る。

「ぜえ……ぜえ

ざまあ…みろってんだ」

しかしシュウの方が遥かに不利な状況に追い込まれた。

（必殺技はもう使えない。

体力のアドバンテージも持っていかれた。

どうする、どうするどう…）

と

「おーい

ボクが存在忘れてない？」

頭の中に女の子の声が響いた。

強化外装、《ジ・アバター》の中に存在するAI…パーティのものだ
シュウは頭の中だけで答える

「ああ…そっぴやいたな

敵に勝てないから武器に頼るといふのは気に入らないが……それしか無いようだな」

一応クロム・ディザスターに対抗する手段はまだある。

心意システムだ

だが例え相手が災禍の鎧だとしても心意を使わないバーストリンク力

ーに対して心意を使うのはシュウにとっては武器に頼る以上の禁忌だった。

「ま、相手の着けてる鎧も相当な反則性能だし躊躇う必要はないと思うよ

それに……」

「それに？」

シュウが聞き返すとパティははっきりと言った。

「この力はもうキミのものだ

例えばそれが偶然手に入れた力だとしても……ね

だから自分の力を使うのに躊躇う必要なんてどこにもないと思うよ」

「言ってくれるな

その理論には賛同しかねるが使ってやろうじゃねえか」

「装着 《ジ・アバター》……！」

天まで届きそうな声で神器をも超える強化外装の名を叫んだ。

第六話（後書き）

おまけ メタ発言（ry

シュウ「今日もおまけの時間がやって来たぜ！」

パティ「今日も張り切っていこー」

シュウ「早速ゲストの紹介だ！」

今日はゲストを二人も呼んだぜ！

それとお前は今日休みな」

パティ「え？

ちょっと、待つ…」

プツン（シュウがパティの音声出力機の電源を切る音）

シュウ「それでは自己紹介をどうぞ！」

タクム「黨拓武です

宜しくお願いします」

チユリ「倉島千百合です！

よろしく!!」

シュウ「早速だが今回の内容について切り込んでいこうか

とりあえず新キャラ（朝倉弓ノセルリアン・フィスト）が出たことについてからだな」

チユリ「いきなり新キャラ視点でのスタートは予想外だったよね」

タクム「でもチーちゃん、前回の終わりの方で既に登場してたし新キャラがクロム・ディザスターに出会うまでの過程を説明する方法の一つとして予想していた人もいるかもしれないよ？」

チユリ「うーん

そう言われればタクの言う通りかも」

シュウ「作者的には始まった直後に別人視点という一種の出落ちにしたかったようだがな」

タクム「そうだったんですか

しかし後半は新キャラがかなり空気でしたけど意図的にそうしたんですか？」

シュウ「そこは成り行きだ。

……まあ次回もきちんと登場するから『新キャラなどいなかった』なんて状況にはならないから大丈夫だ」

チユリ「ところで他にもオリキャラは入れるんですか？」

シュウ「ガンガン投入するつもりだそうだ

そんな訳でオリ主（俺）の周りがオリキャラで埋め尽くされる可能性があるから覚悟しておいた方がいいかもしれない」

チユリ「うわあ

やりたい放題ね」

シュウ「まあそうだな

つつても地味に作者にとつては地味にキツイ選択肢なんだがな

ネーミング的な意味で」

タクム「どういう事です？」

シュウ「……この第六話で作者が最も悩んだのは何に関してだと思
う？」

タクム「……ひょっとして新キャラの名前ですか？」

シュウ「ああ……

リアル側の名前はかなり適当に付けてるがアバター名はそうはいかないからな」

チユリ「それにしても悩みに悩んだ結果がこれって……」

シュウ「あんまり気にしない方向で頼む

という訳で次！

クロム・ディザスターについて少しだけ説明だ」

タクム「たしか4代目でしたよね」

シュウ「クロム・ディザスターは【アクセル・ワールド】第二巻で《リプレイ》の映像データとして姿が描かれていたからそれを元に書いている」

チユリ「わたしは見えてないからなんとも言えないけど…」

シュウ「なに、細かいことは気にするな

まあ今回はこんなところかな」

シュウ&タクム&チユリ「また次回！」

第七話

「帰ってこないな……」

ブルー・ナイトは嘆息しながら呟いた。

「奴から誘ってきて勝手に消えるとは

ランサーの奴我らが王を何だと思っている!!」

「……やっぱり探してきます

そして見つけ次第斬ります」

コバルトブレードは怒りを込めて、マンガン・ブレードはドスの効いた声で言う。

「斬る必要はないと思うんだが……

まあ帰ってこないし探してみるか…

アイツが無制限フィールドにまで来て何もせずに帰るとは思えないしな。一人でエネミー狩りでもしてるんだろ

とりあえず各自別れて搜索、30分後ここに集合だ」

「ハッ!!」

コバルト・ブレードとマンガン・ブレードは返事をすると言ビー・ランサーの逃げた方向へと走っていった。

（ランサーの奴もそこまで無責任な奴じゃないから帰ってくると思ってたんだが何かあったのか？

ま、考えすぎか）

コバルト・ブレードはマンガン・ブレードと別れ、岩が多い地帯へやって来ていた。

（流石にここまでは来てないか……）

それにしても見つけ出したらどの必殺技をぶつけてやるうか

などと物騒なことを考えていると不意に遠くの方で

ズウウウウン

という音が響いた。

（何だ？）

コバルト・ブレードは音の方向へと走った

しばらくすると全身がボロボロの仮想体が倒れていた。

「！？」

おい、しっかりしろ！――」

「う……」

倒れていた青い仮想体は呻き声を上げて指を差した。

その先にいたのは

ジ・アバター
「装着！！」

シュウが叫んだ瞬間黒い球体が出現する。

シュウがそれに触れると球体は形を崩しやがて新たな形を形成し、大斧に変化した。

試しに近くにある岩に斧を振り下ろす。

ゴッ！！

という音と共に自分の身長の三倍ほどの大きさがある巨大な岩が真っ二つに割れ。

（今回は斧か……

ま、威力は相変わらずだな）

「まうた相手の武器の影響受けちゃってるねー」

パーティが言う。

「ランスには化けてくれないのか？」

最も使い慣れた武器なんだが……」

「それはイメージ次第だよ

それと……」

「ランサー……！」

パーティが返答し、何かを言いかけた時いきなり後ろの方から大声で名前を呼ばれた。視線だけを後ろに向けるとコバルト・ブレードがいた。

「っ……！」

そいつは……まさかクロム・ディザスターなのか！？」

コバルト・ブレードはネイビー・ランサーの後ろにいる黒い仮想体をみて声を詰まらせる。

「コイツは俺が潰す……！」

お前はそこのアバターを頼んだ……！」

……行け……！」

コバルト・ブレードは青い仮想体を抱えるとポータルのある方向へ

走り出した。

「敵が攻撃してくるよ!」

パーティが言つと同時に斧を構えたクロム・ディザスターが突っ込んできた。

「さてと……」

たしかジ・アバターには強力な身体強化能力があるんだつたな……

ならその性能を最大限まで利用してやる!」

瞬間ネイビー・ランサーの体が高速でブレる。

突如予測を遥かに上回る速度で移動したネイビー・ランサーをクロム・ディザスターが再び補足した時、対象は真横にいた

「ガ……ッ!？」

クロム・ディザスターが驚愕したような声をだすが直後クロム・ディザスターの脇腹に斧が突き刺さる。

ゴッ!!

という轟音を響かせ

クロム・ディザスターの装甲の一部が碎け散る。

「ガアアアアア!」

とクロム・ディザスターが絶叫を上げる。

クロム・ディザスターは怒り狂ったように斧を振り回す。

「フン！！」

シュウも斧を振り斧と斧がぶつかりあう。

バキイイイン！！

という金属音が響いた

クロム・ディザスターが後退る。

パキイイイイ！！

という音と共にクロム・ディザスターの持っている斧が欠けた。

「グルア！？」

クロム・ディザスターはたじろいだような声を出したがすかさず鉤爪を突き出して反撃した。

ネイビー・ランサーは左ヘスライドして攻撃を回避し、

「腕、もらっぜ」

突き出した腕に斧を振り下ろした。

ドン

という音を立ててクロム・ディザスターの右腕が鎧ごと切断された。

「グガアアア！！」

クロム・ディザスターは叫び、バックステップで一気に15メートル以上遠ざかると口からチューブを吐き出した。

10本以上のチューブ状の触手が一斉にネイビー・ランサー目掛けて襲いかかった。

がネイビー・ランサーの右腕が認識不可能な速度で振るわれると、全ての触手が切断された。

そのまま低姿勢をとりネイビー・ランサーは霞むような速度で距離を詰める。

刹那、クロム・ディザスターの懷に飛び込み

「次はもつと頑丈な鎧を用意しな！ 《ルイン・クラッシュ》！
「！！」

必殺技名を叫んだ。

下からすくい上げるように振り上げられた斧はクロム・ディザスターの鎧の胸に直撃する。

グシャアアア！！

とクロム・ディザスターの鎧は粉々に砕け、そのまま仮想体は爆散した。

「やったな」

「お疲れ!!」

とりあえず一言……いくらボクが 《ジ・アバター》 が強いから
って調子に乗り過ぎ!

普通倒れてるアバター助けるのが先でしょ!」

「う……………」

まあコバルが救出してくれたしアイツはここで倒さなきゃ後々被害
者が増えるからクロム・ディザスターの撃破を優先した」

「その割にはノリノリだった気がするケド

……まああの子が戦闘に巻き込まれないように立ち回ってたから一
応及第点かな」

「そうかい」

シュウは苦笑いで応じた。

ややあってコバルト・ブレードが帰って来た。

マンガン・ブレードとブルー・ナイトもいる

「あの子は？」

シウウが尋ねるとコバルト・ブレードが答えた

「ポータルからログアウトさせた

それよりクロム・ディザスターは……」

「ああ、あそこでくたばってるよ」

シウウが指差した場所にはクロム・ディザスターの死亡エフェクトがあった。

「お前一人で倒したのか

あのクロム・ディザスターを」

ブルー・ナイトが信じられない、といった表情で言う。

「こいつがなかったらとてもじゃないが倒せなかったよ」

シウウは自分の握っている斧を左手でポンポン叩く。

「その強化外装は……この前の黒い球体か？」

「ああ、もうこうなったら後で説明してやる

それより今はクロム・ディザスターだ

復活するぞ」

シュウが吐き捨てるように言った。

「どういう経緯でクロム・ディザスターがコイツに備わったのかはわからない

だがコイツにはここで終わってもらつ

ブルー・ナイトが言うと共にクロム・ディザスターの禍々しい鎧が現出する。

「グルウアアアア!!」

クロム・ディザスターが咆哮を上げて襲いかかる。

「コバルは右翼

マンガは左翼

俺とランサーが正面から迎え撃つ!

いくぞ!!」

ブルー・ナイトの指示が飛び加速世界の猛者4人が舞った。

「……どうする?

逃げちまったぞ」

シュウが疲れたように言った。

実際かなり精神を消耗していた。

普通のバースト・リンカーは連続5回も戦えば相当の精神を消耗するがシュウとブルー・ナイト、コバルト・ブレード、マンガン・ブレードの4人はクロム・ディザスターを相手にかれこれ10回は戦っていた。

「しかし、まさかクロム・ディザスターがワイヤーフックを装備しているとは思わなかったよ……」
シュウが疲れたように

「先代のクロム・ディザスターもワイヤーフックを使っていたのは覚えてるがまさか4代目も装備していたとは

クロム・ディザスターにとってワイヤーフックは基本装備のようなもののかな」

ブルー・ナイトが嘆息して言う

9回目までクロム・ディザスターは復活するたびに襲いかかってきた。

倒される毎に憎しみを増したように攻撃が苛烈になっていったが、10回目に復活したときに消耗しているシュウ達の隙を付いてワイヤーフックを岩に引っかけて突然逃げ出してしまったのである。

シュウは咄嗟に斧を投合したが相手の腕を一本持っていただけに留まった。

「よもや四対一で取り逃がすとは不覚……！」

マンガン・ブレードが拳を握りしめて呟いた。

「クッ……」

コバルト・ブレードも同じ様に悔しそうにつつむいている

「いや仕方ないだろ

精神的にも体力的にも戦線の維持は限界だったしそもそも全員近接型だっつーのはバランス悪すぎだろ……」

シュウが文句を吐いたがブルー・ナイトはあくまでも冷静に言う

「ここまで戦えただけでも上出来だ

それに逃げ出したと言うことはおそらくアイツの残りのバーストポイントが相当少なくなっているということだ

そうでなければアレが自分から逃げ出すとは思えない」

「だが俺達はしばらくは戦えないぜ

消耗が激し過ぎる

……少なくとも俺は数日間是对戦できそうにない」

（といつかなんだこの疲労感…

現実にも影響ありそうなくらい疲れてるんだが……）

とシュウが思っているとパーティが口をはさんできた

「んゝそれはジ・アバターの使いすぎかもね」

「……アレってそんな副作用があるのか？」

「いやいや、単純に慣れてない状態で身体能力を強化して戦い過ぎたっただけ

身体能力が上がる分自分の体勢やスピード、攻撃を細かくコントロールするのが難しいんだよ

だからその分精神を消耗するってことだねゝ」

パーティが軽いノリで言う。

「その辺をサポートするのがお前の仕事じゃないのかよ」

謎の疲労感に納得しつつも呆れたように言葉を返す。

「何事にも限界というものがあるよ

これでもきちんと体のコントロールをサポートしてるんだよ？

むしろこれ以上ボクが仕事してしまうとバーストリンカーの考える動きよりもサポートシステムのの方が優先してしまうから逆にシュウの動きが制限されちゃうんだよ

ま何事も慣れだよ慣れ」

「そうかい」

「…ンサー

おいランサー！」

「うおっ！？

なんだいきなり」

いきなりブルー・ナイトがシュウの名前を呼んできたのでシュウはびっくりしてよろける。

「さっきっからずっと押し黙ってるから声を掛けたんだが

どうかしたのか？」

「あ、いや、なんでもない

ところでクロム・ディザスターはどうするんだ？

放置する訳にもいかないだろう」

シュウの問いに対して

ブルー・ナイトは毅然と答えた

「ああそれについてだが

災禍の鎧は加速世界全体の問題だ

……久しぶりに七王会議を開く必要があるそうだ

」

「そうかい

じゃああとは王の皆さんに頼むとするかな

俺はそろそろ落ちるぞ

流石に11時間以上ぶっ続けて戦い続けるのは応える」

「うち9時間は蘇生待ちなんだがな

それとその武器の説明、忘れんなよ」

とブルー・ナイトが釘を刺してきた。

「（頼むから忘れててくれよ……説明するのは面倒くせえ）

わかったよ

それと会議の報告よろしく」

「話す義務ないんだが」

とキツパリ言うブルー・ナイトに

「武器の説明と交換条件で

武器については当然他言無用で」

とのんびりと言い返す

「わかったよ

じゃ、またな」

ブルー・ナイトはやれやれ、といった表情で返事をする。

シュウはああ、とだけ言っただけでポータルからログアウトした。

第七話（後書き）

おまけ

シュウ「Q： どうやったらジ・アバターの形状を自由に変えられるんだ？」

パティ「A： イメージしろ！！

ってこれ何かのネタ？」

シュウ「ああ

最近作者は『イメージ』という単語を聞くと某カードゲームアニメを思い出してしまつらしい」

パティ「そういえば原作『アクセルワールド』に於いても『イメージ』という言葉は結構重要な単語な気がするね」

シュウ「主に心意システムに関してだがな

前置きはこの辺にして今回のゲストを紹介する

ハルユキの親にして黒の王、黒雪姫だ！」

黒雪姫「ん、よろしく

早速だが今回の話の解説に入るうか

まずは今回クロム・ディザスターを出しシュウと戦わせた理由からだな」

シュウ「（司会が乗っ取られた！？）

え、え」と今回クロム・ディザスターと俺が戦った理由は二つ。

一つは新キャラを出すきっかけを作るため（ただし今回はほぼ出番ゼロである）

もう一つは強化外装ジ・アバターのデモンストレーションの為だ」

パーティ「シュウがジ・アバターを使う前と使った後とでは戦況がまるっきり逆になってるくらいだしね」

シュウ「作者がもし仮に前回と今回の話にタイトルをつけるとしたら第六話を『ワンサイド・ゲーム（前編）』

第七話を『ワンサイド・ゲーム（後編）』にする予定だったくらいのだし

ちなみに第六話は『クロム・ディザスター』にとつての【ワンサイドゲーム】であり第七話は俺こと『ネイビー・ランサー』にとつての【ワンサイドゲーム】だったりする罫」

黒雪姫「ま、ブルー・ナイトとも戦ったしこれだけやれば十分だろう

それと新キャラとやらは次の出番はいつなんだ？」

シュウ「次回かその次くらいに再度出番が回ってくる予定だ」

黒雪姫「フム、

じゃあ最後の質問、

私の出番は近い内にあるんだろうな？」

シュウ「え……

もし『しばらく出番はない』って言ったらどうする？」

黒雪姫「とりあえずお前に《デス・バイ・ブレイジング》をお見舞する」

シュウ「なんで俺が!？」

パティ「このおまけコーナーでのシュウは作者の代理だからね

当然じゃないかな」

シュウ「（コイツ他人事だと思って……）」

まあ、近いうちに出番はあると思っぜ」

黒雪姫「そうか

では諸君

また次回！
」

シュウ＆パティ（締めまで持っていかれた！？）

第八話

対戦フィールド。

そこは普段激しい戦いが繰り広げられ、それをギャラリーたちが観戦する賑やかな空間だが、この対戦フィールドでは戦闘は行われていない。そして《クローズド・モード》により現在ギャラリーは一人もいない。

そんな静かな世界に青い仮想体が二つだけ存在していた。

「んでなにを話せばいいんだ？」

シュウは面倒くさそうに尋ねる。

「あの強化外装……『ジ・アバター』という名前だったか

アレについて入手した経緯から性能まで全てだ」

ブルーナイトはまるで取り調べをする警察官のように話す。

「いや、約束だから入手経緯とかは話すけどよ、それ以外に関しては俺でも知らない事の方が多いくらいだぞ」

シュウが嘆息して返す。

クロム・ディザスターを撃破して5日経った。

パーティとは何度か会話を交わしていたが（大抵はパーティが一方的に話しかけてくる）、ジ・アバターについてはあまり話してくれないのである。

しかもただ面倒くさいという理由で。

（まったく面倒くさがらずに話せばいいものを）

「ブルー・ナイト相手に散々言い渋ったお前が言っな」

パーティが何かを言うてきたがシュウはそれをスルー。

（さてと話しますかな）

「……………つまりいきなり地面に穴が空いて落ちた先にあったと」

「ああ、偶然手に入っただよねコレ」

「にわかに信じ難いな」

「だろうな」

ゲームでは普通強力な装備ほど入手難度は上がっていく

そしてブレイン・バーストではそれが最も顕著に表れている

明らかに入手難度と性能がかみ合っていない」

シュウが説明していく

「そもそもいきなり地面に穴があく現象自体が謎だ

ブレイン・バーストのバグか何かか？」

「このゲームでバグが起こるとは思えないがな

まあいずれにしろ努力せずに手に入れた力だからあまり使いたくね
ーって訳だ」

「そもそもそんなものが普通の対戦で使われたらゲームバランスが
崩壊するぞ」

「お前の神器も大概だと思いがな」

シュウが減らず口をたたく

「……その神器ですら破壊するような性能だぞ」

「ま、そんな訳で普通の対戦で使う気はさらさらないって事だ

お前みたいに苦難を乗り越えて手に入れたとしたら使ってたかもし
れんがな

あと一つ念を押しておきたい事がある」

「なんだ？」

尋ねるブルー・ナイトにシュウは頭を掻きながら言った。

「ジ・アバターに関しては他言無用だということだ

他の奴に気づかれると厄介なことになりかねないからな

特にあの黄色い奴とか硫黄色の奴とかレイディオとか」

シュウが苦い顔をして答えるとブルーナイトも納得したように

「ああ……というか同一人物だろ」

と苦笑いで答えた。

「さて時間がない

今度はそっちの番だぜ」

シュウは対戦の残り時間が半分を切ろうとしていることに気づいて話題を変えた。

「クロム・ディザスターについての報告だな」

と切り出しながらブルー・ナイトは話しを続ける

「3日前に七王会議では総力を上げて討伐する事に決定した」

「それで？」

「昨日、クロム・ディザスターの永久退場を確認したとの事だ

俺は居合わせなかったがな」

「そうか……」

親はてつきりまだ生きてると思ったんだが」

「どうやらレベルアップ直後でバーストポイントのマージンがほとんどなかったらしい」

「鎧は？」

「居合わせた全員が完全消滅を確認した」

「ようやく災禍の鎧も消えたか」

「災禍の鎧との闘いも長かったよ……」

災禍ももう終わりだ」

ブルー・ナイトが遠い目をして言う。

「さて、この話はこれくらいでお前に会いたがってる奴がいるんだが」

ブルー・ナイトが話題を変えてきた。

「げっ、もしかしてコバルとマンガか？

なんかかんやでエネミー狩りの約束すっぱかしちまったし相当キレ

てるんじゃ……」

焦った声を出すシュウに対してブルー・ナイトは手を横に振って答える

「いやいや、あの時は『見つけ次第斬る』とか言ってたがあの二人じゃない

セルリアン・フィストだ」

「セルリアン・フィスト？

聞き覚えがないんだが……」

「お前がクロム・デイズターから守ったアバターだよ」

とブルー・ナイトが言つとシュウは合点がいったように手をポンと叩きながら言つ。

「ああ、そんな名前だったのか

で何の用なんだ？」

「そこまでは聞いてないな

まあ十中八九お礼の類いだと思うが」

「うーんお礼よりそいつと戦ってみたい

どんな戦いをするのかが気になるしな！」

「お礼に来た奴と戦うとはお前は相変わらずの戦闘狂っぷりだな」

高らかに戦闘宣言をするシュウにブルー・ナイトは呆れたように言う。

「バースト・リンカーにとっては戦う事こそが最大の娯楽、

そしてバースト・リンカーにとっての全て!!

そう思うだろ？

「アンタも!!」

アツく語るシュウにブルー・ナイトもなんだかんだで肯定する

「ま、そうだな

とりあえず時間が無いしセルリアン・フィストのいるエリアと会う
為の日時を教えてやる」

「ああ、サンキューな

それはそうとあと5分ある訳だが久しぶりに殺り合おうぜ!」

「流石に時間ないだろ

一旦対戦を終わらせてから再戦を「隙ありい!!」「ぐべあ!!」

ブルーナイトが言い終わる前にネイビー・ランサーの拳が顔面を捉

えた。

「っ！

デメエやりやがったな！！

強化外……「出ません！！」うおおおお！！？」

ブルー・ナイトが強化外装を出すよりも早くネイビー・ランサーの蹴りがボディに向けて繰り出される。

ブルー・ナイトは咄嗟に腕でネイビー・ランサーの蹴りを左腕でガード。

更にブルー・ナイトほぼ条件反射で右腕を振るいネイビー・ランサーに殴りかかった。

結局時間切れになるまで強化外装を出すことなく殴り合いを続けた二人はどこか楽しそうだった。

余談ではあるが最初の一撃がクリーンヒットしたのが効いてシユウが勝ったのだが、直後ブルー・ナイトは再戦をけしかけ勝利を収め、ギャラリーを大いに湧かせたという。

「さて、この辺だったっけ

「

現在シュウは 区の一角にいた

と、突然加速状態になり対戦フィールドにネイビー・ランサーとして放り出される。

「来たか……」

「あの、この前、アバターに襲われていたわたしを助けてくれましたよね？」

わたしどうしても貴方に会ってお礼とお願いがしたくて」

ハキハキとした声をだす少女。

「別に礼なんていいよ

でお願い？」

「はい

わたしを弟子にしてくれませんか？」

「……………え？」

「わたし強くなりたいんです！！」

セルリアン・フィストの予想外の台詞にシュウはポカーンとしてか

らはっとしたように慌てて言う。

「いやいやいやいや俺そついうの向いてないから!!」

というかそついうのは《親》の役割じゃないの!？」

「え」と

わたしの《親》はわたしの姐なんですけどブレインバーストに於ける基本だけを教えて『あとは自分で頑張りたまえ』とか言っつと放置ですよ……

一応アドバイスだけはくれるんですが……」

という普通ではありえないような事を話すセルリアン・フィストにシュウは何故か神妙な顔をして言う。

「……そついう《親》もごく稀にいるからな」

「そついう《親》知ってるんですか？」

「ああ

というかまだ連絡がつく分お前の《親》の方がアドバイスくれる分マシだ

俺の《親》なんか無制限フィールドについて教えてもらって以来音信不通だぞ……」

シュウがげんなりして言う。

「あゝ」

それは気の毒に……」

「まあそういう事情なら仕方がないか……」

といってもやはりナイトやマンガ、コバルの方がきちんとした教え方を知ってそうだな……」

というシュウの意見に対して

「三人そろって『ネイビー・ランサー』に鍛えてもらうべき』だと言
ってましたけど」

（アイツら………）

後で覚えてやがれよ）

と思いつつもシュウは腹を拘り言った。

「よしわかった

俺が鍛えてやる」

「ありがとうございます師匠!!」

「いや、頼むから普通に『ランサー』と呼んでくれ

あとタメ口でいいからそこところよろしく」

「え………うん、じゃあお言葉に甘えて

……それにこっちの方が『仲間』って感じがしていいよね

あ、それとわたしのことは『セルフイ』って呼んで

「オーケー！」

じゃあセルフイ

バトルしようぜー!!」

「え………と…」

なんでいきなり宣戦布告を？」

「俺がお前と戦いたいからだ!!」

「……………」

返ってきた答えが余りにも無茶苦茶だったので呆然としていたユミだが

（いや、口ではああ言ってるけど本当はわたしの実力を見極めようとしてるのかも）

という結論に達し、拳を構える。

（だったら見せてあげるわ

持てる限りの力を！！）

「ではこのセルリアン・フィスト

いざ尋常に勝負！！

ハアアアアア！！」

最初に出たのはユミ。

ネイビー・ランサーに向かって突き進み 右腕を突き出す。

「フン！！」

シュウは右へ僅かにスライドし回避。

ユミはその運動量を利用しすかさず回し蹴りを 放った。

シュウは即座にしゃがむ。

頭ギリギリを足を掠める

シュウはセルリアン・フィストの攻撃をかわすと拳を突き上げアッパーを繰り出した。

「っ！！」

セルリアン・フィストは後ろへ引きネイビー・ランサーの一撃を回避する。

「ほう、いまのを避けるか」

シュウが関心したように言う。とセルリアン・フィストは当然、といった感じで答える。

「わたしは格闘型のアバターよ

これくらいなら避わせるわ

それよりあなたはランスを使わないのかしら？」

「ま、今回は格闘戦ってことで

しかしこつもアッサリかわされるとな……………そろそろ本気出す」

シュウは言う。と霞むような速度で接近してきた

「なっ！？」

一瞬で距離を詰められた事に驚くユミ

直後ネイビー・ランサーはラッシュを繰り出してきた

ユミは咄嗟に腕でガードをするが一撃一撃が重いため体力ゲージがガリガリと削れていく

（このままじゃ確実にやられる……）

ここは一旦距離を取って体勢を立て直す！）

ユミはそう判断し全力で後ろへ飛び、ネイビーランサーとの距離をとる。

ユミは必殺技ゲージを見た。両者共にそれなり貯まっている。

（使うなら今！！）

ユミは呼吸を整え、ネイビー・ランサーに向けて必殺技を叫ぶ。

「《ジェット・ブレイサー》！！」

直後セルリアンフィストの腕からジェットが噴き出してネイビー・ランサー目掛けて高速で突き進む。

「んなっ！？」

右腕からジェットを噴射し、ほとんど滑空した状態で突っ込んでくるセルリアン・フィストに驚愕するシュウ。

二人の距離がゼロになった瞬間セルリアン・フィストはネイビー・ランサーに拳を叩きつけた

「……イ……ジャ……プ……！！」

ネイビー・ランサー何かを叫んだ。

直後拳が叩きつけられる。

ズウウウウン

という音と共にその衝撃で土埃が舞う。

しかしシュウはそこにはいなかった。

周りを見回してもネイビー・ランサーは見当たらない

「っ!!」

ランサーは!？」

「おおおおお!!!!」

ネイビー・ランサーの雄叫びが聞こえた。

しかしそれは前後左右のどこからでもなく、

(上!?)

ユミが見上げると上空からネイビー・ランサーが落下しながら蹴りを繰り出すところだった。

「ちよっ……………キヤアアア!!」

ドゴォ!!

という轟音と共にセルリアン・フィストの頭部に蹴りが直撃し、彼女の体力ゲージはあっけなく尽きた。

第八話（後書き）

おまけコーナー

パティ「ボク今回は空気だー！！」

シュウ「新キャラが増えれば増えるほど相対的にお前の出番は減る

なに、必然的な事だ」

パティ「いくらなんでもあんまりだよ！！

出番の増加を要求する！！」

シュウ「今回の出番はおまけコーナーで稼ぐという事で

なので今回はゲスト無しだ」

パティ「出番増えるのはいいけどそんなおまけで大丈夫か？」

シュウ「大丈夫だ、問題ない。

次回からまた出していくから」

パティ「一番いいゲストを頼む

さてそろそろ本題に入らないと

という訳でボクが気になった事聞くね」

シュウ「オーケー」

で気になった事って何だ？」

パティ「今回シュウが『そろそろ本気出す』って言った後、『霞むような速さ』でセルリアン・フィストとの距離を詰めたって書いてあるけど前に《ジ・アバター》を装備した時にも同じ表現をしたよね」

シュウ「え……………」

パティ「正直違いがわからないんだよね」

シュウ「一応説明はできるんだけど……………」

実際問題作者のポキャブラリーの少なさ故だ

……………ホントすいません」

パティ「ポキャブラリー以外にも問題だらけな気がするけど……………」

とりあえず説明を」

シュウ「今回の『霞むような速さ』というのはセルリアン・フィストの視点から見ての『霞むような速さ』で、『ジ・アバター』を装備した状態での『霞むような速さ』というのはブルー・ナイトやクロムディザ・スターレベルのバーストリンカーが『霞むような速さ』

に感じるということだな

仮に今回の話での相手がナイトとかだったら同じシーンでも『霞むような速さ』にはならないってことだ」

パティ「ふうん

んじゃ次！

今回バトルは拳オンリーで武器使ってない訳だけどそれってタイトルそのものを否定してない？」

シュウ「拳も立派な武器だ！！」

とりあえず拳で戦ってみたかった！！

反省はしていない」

パティ「……ボクに体があつたらぶん殴つてるところだよ

この翻訳装置攻撃機能とか付かないかな」

シュウ「怖いこと言うなよ

今回殴り合いになったのはこんな機会滅多にないからだ

大事な事なのでもう一度言おう

やりたかったからやった！！」

パティ「はいはい

まあ《剣聖》の異名を持つブルー・ナイトが剣使わず殴り合うなんて場面普通に考えてありえないからね」

シュウ「とまあ今回はこんなところだな」

パティ「また次回！」

第九話

ネイビー・ランサー とセルリアン・フィストは無制限フィールドにいた。

目的はただ一つ。

セルリアン・フィストを鍛えることであることである。

「よし丁度いいエネミーを見つけたぞ」

シュウが言うところ前方100メートルほどのところに全長5メートルほどのライオンの様な獣型エネミーがいた。

「え」と

わたしアレと戦うの？」

「ああ

ちなみに俺は何もしないで見守ってるから

……《ハイジャンプ》！」

ネイビー・ランサーは必殺技名を叫ぶと一気に50メートルほどの崖の上へ登ってしまった。

「……………」

ユミはエネミーを凝視する。

とエネミーの方がセルリアン・フィストに気づいたらしく、

「グルアアアアア！」

と雄叫びを上げるとセルリアン・フィストの喉目掛けて襲いかかってきた。

「うゝもう仕方ないわね」

セルリアン・フィストは拳を構え敵を返り討たんとする。

「キミも相変わらずだね」

パーティが呆れたように言った。

「まあ常に強敵と戦ってれば伸びるだろ」

シュウが頭の中だけで答える。

毎回セルリアン・フィストの適正レベルより若干強いエネミーと戦わせる。

そして戦闘後アドバイスを与えていく。

ここ数週間はずっとこんな感じだった。

最初はかなりボロボロに負けていたが最近ギリギリで勝てるようになってきた。

獣型エネミーは鉤爪を振るう。

「グッ!!」

セルリアン・フィストは体を捻り回避。

エネミーはそのまましばらく距離をとり再びセルリアン・フィスト目掛けて突進する。

（速い……

なら……!）

「オオオオオ!!」

セルリアン・フィストは横へ全力で飛び、着地と同時に体の向きを180度回転させると直後必殺技名を叫んだ。

「《ジェット・ブレイサー》!!」

セルリアン・フィストの右腕からジェットが噴射され、猛スピードでエネミー目掛けて突撃する。

エネミーはしばらく進んだのち足を止め、再びセルリアン・フィストの方に方向変換をする。

（エネミーの動きが止まってかつ相手の弱点に攻撃出きるタイミングは今しかない！！）

エネミーが振り向いた瞬間その顔面にセルリアンフィスト拳がクリンヒットした。

「ガアアアア！！」

エネミーが悲鳴をあげる。

セルリアン・フィストはここぞとばかりエネミーの顔にラッシュを叩きこむ。

エネミーの体力ゲージゲージがみるみる減少していつて最後には完全にゼロになりエネミーは爆散した。

と今まで上にいたネイビー・ランサーが降りてきた。

「お疲れ！

というか楽勝だったじゃねえか」

シュウは労いの言葉と共にそんな事を言う。

「でもスピードもそこそこあったし攻撃力も一撃でも当たったら危ないくらい高かったしホントヒヤヒヤしたのよ！」

ユミはプンスカと怒った様に言う。

「スピードもそこそこで攻撃力も高い

だが動きが単調で防御が低い

もつと強いを用意すればよかった」

「いやあなたね……」

とユミはげんなりとして言ったがシュウは考え事をしているようだった。

（うゝん下級エネミーには大抵ともに戦える様になったしそろそろアレと戦わせるか）

「えゝとボクにはキミが何を考えてるか分かるんだけど………本気？」

「本気SA」

シュウは頭の中だけでパティに対しておちゃらけて言うത്セルリアン・フィストに対して言った。

「よし体力もほとんどマックスだし休憩したら次いくぞ」

「えゝ」

ユミが嫌そうに言うがシュウは即座に返す。

「強くなりたくないのか？」

「行きます

行かせて下さい!!」

「よしいい返事だ

そついう素直な奴は結構好きだ」

シュウは言つとユミはいきなりあたふたしだした

「ふえ？

ちよなに言つてんのよ!？」

「え？」

シュウはなんで取り乱しているのかわからない、といった声を出した。

「え〜とキミはナニを言ってるのかな？」

（さっきからコイツらの反応がわからない）

そんな事を思いつつ シュウは言った

「んじゃそろそろ行くかな」

「え、あ、うん

よしし例えどんなエネミーだろうと倒すわよ!!」

ユミは気合いを入れ直した。

それから20分ほど進んでいくとソイツはいた。

ユミは今回のターゲットとなるエネミーを眺めていた。

さっきのシュウのセリフに対するモヤモヤだとかそのあと入れ直した気合いとかそういうものは一瞬にして消し飛んでいた。

全長20メートル弱のソイツはユミくらいのレベルのバーストリンカーなら20人がかりで戦うようなエネミーである。

「え……と……」

このエネミーは？」

「いわゆる《巨獣級》って呼ばれてる奴だな

健闘を祈る」

シュウがにこやかに言つとユミは手早く言った。

「チェンジで」

「断る」

即答。

「イヤイヤヤどう考えてもわたしの勝てる相手じゃないわよコレ
!?!」

「大丈夫、勝てとは言わない

頑張って生き残れ

できるだけ長く」

とだけ言つとセルリアン・フィストの背中をドン、と押した。

物影から飛び出したユミとエネミーの目と目が合う。

「じゃ、俺はこれで」

シュウは言つとどこかへ行つてしまった。

「無茶しやがって……」

「誰が無茶させたのかな？」

シュウとパーティがそんな会話をする。

「ジョークだ

まあよく持ったほうだな

助けられれば助けたんだがピンチに陥ってから倒されるまでがほぼ一瞬だったからな」

セルリアン・フィストはエネミーの苛烈な攻撃をひたすら回避していたがエネミーの攻撃による余波を受けて体勢を崩し、そこへ一撃を食らって力尽きたのである。一瞬のうちの出来事だった。

そんなこんなでセルリアン・フィストは現在エネミーの足元に死亡エフェクトとして存在している。

「よっしゃ弔い合戦じゃ!!」

セルフィ、いま仇をとる!!」

「ある意味セルフィを死に追いやったのはシュウだと思っただけど……

まあいいや

仇打ちということならボクも力を貸そう!」

「いや、お前の力は借りねえから」

「フレイ・ランス
強化外装!!」

叫ぶと共に巨大なランスが出現する。

シュウはランスを構え必殺技名を叫ぶ。

「《スタブ・グランス》!!」

ネイビー・ランサーがほとんど視認出来ない程の速度でエネミーに突っ込む。

瞬間ズドン、という音と共にエネミーの腹にランスが根本まで突き刺さった。

「ゴガアアアアア！」

エネミーが悲鳴を上げる。

シュウはランスをエネミーから引き抜くとそのまま着地。

更に右足に高速で突きを繰り返す。

ブシャ ブシャ ブシャ ブシャと言う音をたて、エネミーの足に何度もランスが突き刺さる

エネミーはバランスを崩し、よろける。

そこへシュウはバットの様にランスを振り、左足にランスを当てる。

ドゴォー！！

という鈍い音をたてて巨大なエネミーは倒れようとする。

エネミーが倒れるより先にシュウはエネミーが倒れたら頭が来るであろう地点に一瞬で移動すると再びバットの様にランスを構える

エネミーが倒れる刹那、シュウは更に必殺技名を叫んだ

「《ルイン・クラッシュ》」

降るわれたランスは倒れてきたエネミーの頭部に直撃し、頭が粉々に砕け散った。

（いくらなんでも強すぎでしょ……）

ユミはモノトーンになった視界の中でこの戦闘を眺めていた。

「シュウ

ジ・アバターの使い方だけでも習得したら？」

セルフイを鍛え出して1ヶ月ほど経ったある日、パーティが突然そんな事をいつてきた

「いや使わないからなー」

「まゝ念には念を

またいつかクロム・ディザスターみたいな奴が現れるかもしれないよ？」

「本音は？」

「ボクを使つて！」

暇だから――！」

シュウはやれやれ、と首を振るが普通の対戦に使わなければいいとだけ考えていたため、パティの建前も最もで不測の事態を想定して使い慣れておくのもいいかもしれない、と考え

「んじゃ無制限フィールドの過疎地でエネミー相手にトレーニングするか」

「という建前で実はもう一度ジ・アバターの力を振るいたいシュウであつた」

「オイ」

つい声にだしてビシツとツツコミを入れてしまったシュウ。

（まあ本当のことなただけだな）

「じゃあレッツゴー」

「アンリミテッド・バースト――！」

叫ぶと共に広大なフィールドにシュウのアバター《ネイビー・ランサー》が出現した。

人がいないところまで移動する。

自然公園の森である。

（視界悪い薄暗い虫型のオブジェクトがいるという三拍子で人気ないんだよな

エネミーが大量に出現して稼ぎ易いのに）

と考えてふと思い出す。

（そういえばここでジ・アバターと出会ったんだよなー

そこでジ・アバターの扱い方を習得するとは感慨深いな）

「ぼーっとしてないでトレーニングいくよ」

「ああ」

「とりあえず《ジ・アバター》を出してから武器をイメージして」

「ジ・アバター強化外装！」

名前を叫ぶと黒い球体が出現した。

それに触れ自分の持っているランスを強くイメージする。

（この動作どっかでやったような……）

少し考えてすぐに思い出した。

心意システムである。

（ならイメージの仕方を変えればいい）

ランスをイメージするのではなく最初からランスに変形する強化外装だと思い込む。

すると黒い球体がグニヤリと曲がりやがて巨大なランスへと変化した。

「よくできました！

基本何も考えてないほうが成功しやすいんだけどね

それだと好きな武器にできないからね」

パーティが説明していく。

「……完全に精神制御系じゃねえか

危うく過剰光出すところだったぞ」

「まあ心意の発動に近いものがあるからね」

少し考えただけでポンポン形が変わっちゃうんじゃ使いづらい事の上ないからね

という訳でレッスン2

とにかく使おう」

「適当だなオイ」

「だって自由な形状にして戦う武器だからね

……………あれ？」

パーティが答えるが突然言葉を詰まらせた。

「どうした？」

「うっん、なんでもない」

（まだ何かあったような……………だめだ思い出せない

多分記憶データの一部が凍結または破損してるんだろうけど…………

むゝモヤモヤする）

と一人悩んでる間にエネミーがやって来た。

「シューー!!」

「なんだ？」

「あのエネミーを叩き潰すよー!」

「ん、ああ

当然そうする

パーティは鬱憤を晴らす為に叫ぶがシュウは当然気づかない。

（つつかあの時のエネミーじゃねえか）

それはかつてジ・アバターを発見する直前に戦っていた10メートルくらいの身長をもつゴリラのようなエネミーだった。

「グオオオオオー!!」

エネミーは雄叫びを上げて拳を振り下ろす。

シュウは片手でバットを振るう様にランスと化したジ・アバターを振るう。

いい。

拳とランスがぶつかりあった。

ゴシャという音と共にエネミーの腕が潰れた。

更にジャンプで一気にエネミーの胸まで飛びランスを心臓に突き刺さす。

突き刺さしたときの衝撃で胸の辺りに大穴が空いてエネミーはあっけなく爆散した。

（たった二発かよ……）

相変わらずの性能に呆れるしかないシュウだった。

第九話（後書き）

おまけコーナー

シュウ「さて今回もおまけコーナーの時間がやってきたぜ」

パティ「よしこい！」

シュウ「さて早速今回のゲストだ

第一期ネガ・ネビュラスの四元素の一人！
スカイ・レイカーこと倉崎楓子だ！！」

楓子「よろしくお願いします」

シュウ「さて、今回は修業回だった訳だが

そこで質問だ」

楓子「なんでしよう」

シュウ「修業あんな感じで大丈夫かな？」

パティ（どう考えても駄目でしょ

巨獣級のエネミーと戦わせるなんていくらなんでもやり過ぎだと思
うよ）

楓子「うゝん

少し生ぬるいんじゃないでしょうか」

パティ「!？」

シュウ「ですよー

いやゝ誰かを鍛えるのは始めてで手加減し過ぎてたみたいだよ

これからはビシビシいかなきゃな」

楓子「フフ

その意気ですよ」

パティ（セルフィ逃げて、超逃げて!!）

シュウ「四大ダンジョンとかはどうかな」

楓子「あそこは二人で行くようなところではないと思いますよ

それに奥まで行こうと思ったらどれだけかかるか……」

シュウ「流石に奥まで行くつもりはないよ

まゝ潜伏期間は10日程度に留めておくつもりだから大丈夫だろ」

楓子「そのくらいなら中々強力なエネミーが出現する場所を知って

るけど教えましょうか」

シュウ「うん頼むわ」

パティ「コノヒトたちハナニライツテルノ？」

物影に隠れているユミ

（ちよつとおまけコーナーを覗こうとしたけど今出ていったら確実に終わる……）

シュウ「お、ユミじゃないか」

ユミ（あ、気付かれた……）

シュウ「ちよつと良い修行方法を思いついたんだが」

ユミ「ちよつと待っ……」

その後ユミはダンジョンに放り込まれました。

第十話

セルリアン・フィストが修行を始めて数ヶ月が経過していた。

「なかなかバーストポイントが貯まらないわ……」

勝率もあんまり高くないし」

修行を始めてから2ヶ月弱でレベル5に辿り着いた。

その間四大ダンジョンに10日ほど放り込まれたりしたがなんとか生きてきた。

しかしそこからなかなかバースト・ポイントを稼げずにいた

「ま、同じかそれ以上のレベルの、それもいろいろなタイプの敵と戦ってたらそりゃ勝率も稼げないわな」

「『相手を選ぶな』って言ったのランサーだったわよね

こうなる事が分かってて言ったの？」

「まあね

効率重視で戦ってたらに今ごろレベル6にだいぶ近づいてただろうな」

「じゃあどうしてわざわざ非効率な方法を？」

「確かに効率を重視すればレベル6までならいける

だがな、そういう奴はそこから先の領域に辿り着く事ができない

レベル6の壁は誰でもぶち当たるもんだ

それをどう乗り切るかが重要だ

という訳でひたすら戦え

せつかく対戦フィールドにいるだし戦おうぜ」

シュウはニツという笑みを浮かべて言う。

「いやまあランサーの事だから予想してたけどね」

ユミは呆た顔（フルフェイスのマスク着用なので実際分らない）
で言った。

そんな会話をした翌週。

「バースト・リンクー!!」

シュウは加速するとマッチングリストを開いてブルー・ナイトの名
前を探す

（ここんところ戦ってなかったからな）

と《ブルー・ナイト》と書かれた文字列を見つけた。

何の迷いもなく対戦ボタンを押そうとするが名前の隣に書いてあるレベルが視界の隅に写り、手が止まった

そこには

《LEVEL:9》

と書かれていた。

（ナイトの奴……遂に辿り着いたのか……

レベル9に!!）

それだけ考え、止めていた手を再び動かし、対戦ボタンを押した。

対戦フィールドに出現してカーソルを頼りに進んでいくとそこにブルー・ナイトがいた。

「ナイト!!」

シュウが叫ぶとブルー・ナイトがこちらを向く。

「ああ、ランサーか……」

返事をするブルー・ナイトの声はどこか沈んでいた。

「お前レベル9になっただろ？」

「って生気を感じないんだが何かあったのか？」

「ああ……レベル9になった

2日前の出来事だよ

「ただレベル9になってから会ったのはお前が最初だがな……」

「？」

「普通すぐにもレギオンの人間に報告するだろ

生気を感じられないのはレベル9関連か……」

「ひよとしてレベル10になる条件があまりにも難しくて絶望してたクチか？」

「茶化すように言うシュウだったがブルー・ナイトはそれを肯定した。

「概ね合ってるよ

「レギオンの人間に話せなかったのはこの2日間一度も対戦しなかったからだ

「あまりにも取り乱してしまってね、対戦どころじゃなかった。

「今でも嘘であって欲しいと願うよ」

「……お前がそこまで言うとはな

一体どんな条件なんだ？」

「条件そのものは簡単だ

『同じレベル9バーストリンカーを5回倒す』

それだけだ」

「……は？」

シウウは意味が分からない、と言った表情で言う。

「お前なら楽勝じゃねえか

他の王達もレベル9に辿り着くだろうし、お前は今までに何回他の王を倒してきた？」

「……問題はレベル9のバースト・リンカーに課せられた特別ルールの方なんだよ」

「特別ルール？」

「同じレベル9同士が戦い死亡した者はたとえどんなにバーストポイントを持っていようが即ポイント全損

それがレベル9に課せられた特別ルールだ」

「なっ！？

嘘だろ……

それじゃあレベル9を5回倒すっていうのは……」

シュウが戦慄する。

「言い換えれば『レベル9のバーストリンカー5人を加速世界から永久退場させる』ということだよ

そして一度でも負ければこの世界から消える

それ以前に友を5人も殺すなど俺にはできない

もし……いや、ランサー、お前なら確実にレベル9に辿り着くだろう

その時お前ならどうする？」

ブルー・ナイトはシュウに対してそんな質問をした。

「……お前の話のせいでレベル9になる気が一気に失せたじゃねえか

ブレイン・バーストは『対戦』をするためのゲームだ

俺は対戦は『戦闘狂』と呼ばれる程度には好きだが殺し合いは嫌いだよ

お前や他の王たちと対戦するのは大歓迎だが殺し合いをするのは勘弁してほしい

それ以前に仮にこちらに死のリスクがなかったとしてもお前らたちと一度しか戦えないというのは俺だったらストレスで死ぬと思う」

「最後の一言で台無しだよ

というかその立場に立たされるこっちの身にもなってくれ」

最後の一言だけおどけて言ったシュウに対してブルーナイトは笑って返した。

「まあ面倒な話は他の王達とやっててくれ

俺にレベル9の力を見せてくれよ」

シュウは言うところをランスを出して構えた。

「レベル9になっても手加減は一切なしだ

……征くぞ」

「しかしデカイ口を叩いたわりにはボコボコだったね」

パティが茶化す。

が、シュウは反発したりしなかった。

実際惨敗だったからだ。

「ナイトの奴更に強くなってやがる……」

まあ当然か」

思考音声で返す。

「家に誰もいないし普通に喋ればいいのに」

「もはや癖だな

普通に喋ってそれが逆に癖になっちまったら町中で痛い目で見られる事になるしな」

パーティの質問に律義に返答する。

シュウはパーティと会話しながらも考える。

（修行不足は俺の方だな

セルフイに『修行しろ』なんて言えたもんじゃねえなこりや）

「ねーシュウ」

「なんだ」

「キミはさつきブルー・ナイトに対して『殺し合いは嫌いだ』って言うってたよね」

突然のパーティが話題変換をしてきた。

「藪から棒になんだ？」

「ずっと聞きたかったけどいきなり戦闘始めちゃったからね」

「わりいわりい」

せっかく対戦フィールドにいるんだし戦わないと勿体無い気がするな
とりあえず言っただけには言っただけだがそれがどうした？」

「まあ大したことじゃないんだけどね」

『殺し合いは嫌い』って言葉

あれって嘘でしょう？」

「え？」

いきなりのパーティのセリフに戸惑うシュウ。

しかしパーティは続ける。

「キミはたとえ『殺し合い』だとしても嬉喜として殺し合いをする
よ」

「こ」冗談を」

シュウがおどけて言うがパーティは尚も続ける。

「でもクロム・ディザスターと戦ってる時のキミはとても楽しそうだったよ

セルフィを助けるという本来の目的を忘れてしまう程にね」

「……………」

「ブルー・ナイトがキミのことを『戦闘狂』って呼ぶのも分かるよ
きっとブルー・ナイトもキミがそういう人間だということに気づ
いていたんじゃないかな？」

「ナイトがね……………」

「だからシュウにセルフィを託した

キミに変わって欲しかったからだろうね

まあボクは今のキミも結構気に入ってるんだけどね」

（ 好敵手と呼べる者はいる

戦う過程で友情が芽生えたことなら何度もある

だが今まで『仲間』と呼べる人は今まで一人もいなかった）

シュウはぼんやりと考える。

「果たして俺のような人間が仲間を守れるのかね……………」

「まあ内容は無茶苦茶だけどすっかり面倒みてるし大丈夫じゃない？」

「どこが無茶苦茶だ

きちんと手順踏んでトレーニングしてるんだぞ」

「いきなりレベル4のバーストリンカーを巨獣級エネミーのテリトリーに放り込む行為がきちんとしたトレーニングだとしたら大抵なにをやっても許容されてしまう気がするんだけど……」

「ハッハッハ

そんなこともやったな」

「……とりあえずシュウみたいな人間に付き合わされるセルフイにはご冥福をお祈りするよ」

いつの間にか他愛のない話に変わっていたがその中でシュウは決意した。

（ナイト……

俺の戦闘狂な性格が変わることは多分ないと思うぜ

だが仲間を大事にすることだけは約束しよう）

「あれを大事にしていると見えるのかね」

「テメエは当たり前のように人の心を読むな」

シュウが顔を真っ赤にして言う。

「まあまあ」

男と男の約束ってやつかな？」

「相手いないんだし約束としては成立してないけどな

ただ一人で勝手に誓っただけだよ」

シュウは屈託のない笑みを浮かべながら言った。

第十話（後書き）

おまけコーナー

シュウ「今回もいつも通りおまけコーナーを始めるぜ」

パティ「お」

早速だけど戦闘シーン皆無だね」

シュウ「どうしても会話が多くなってしまつんだと作者が言ってたぞ

ちなみに次回の第十一話は今のところ予定しているだけでも会話オンリーになるのが避けられそうにないそうだ」

パティ「たしか【アクセル・ワールド】って格闘ゲーム主体の物語だったよね」

シュウ「十二話にはきちんと戦闘シーンを入れるさ

……多分」

パティ「流石に三話連続で会話オンリーはマズイとボクは思っんだ」

シュウ「ですよー」

パティ「さて、今回の本題としてはシュウのダークなところを若干出してみた、という感じになってるんだよね」

シュウ「ま、単に俺が戦闘大好きな人間だったってだけの話だから黒い部分とは少し違うと思うんだけどな」

あともう一点ブルー・ナイトに関してだが、原作では余り登場していないから詳しい性格がまだわからないんだよな」

パティ「結構気さくな人、って書いてあったと思うけど初対面のハルユキ君の第一印象だからね」

シュウ「ま、そういうこと」

なのでいつか原作でブルー・ナイトのメイン回があったとしたらこの作品のブルー・ナイトの性格が原作と違っている可能性があるのでご了承下さい」

パティ「ところでゲストは？」

シュウ「すまない」

出せるキャラはいるんだがこの辺りの内容的にあまり解説するようないないんだ

故にゲストは少しの間出さない」

パティ「前回のおまけコーナーもあまり内容に触れたり解説したりする点がなかったからあんなことに……」

シュウ「ユミの犠牲は無駄にはしない……多分

ちなみに前回のおまけコーナーは作者的には『書いてて楽しかった』

そうだ

あと今回の話は聞き流してしまつて構わないです」

パティ「作者的には今回の話あまり重要だと感じてないからね」

シュウ「そういう訳だ

っとそろそろ時間だ」

パティ「……書くこと無くなつただけだね」

シュウ「また次回会おう

さらばだ!」

ダッ（シュウが駆ける音）

パティ「あ、逃げた」

第十一話

王達がレベル9になったことにより開かれた七王会議により不可侵条約が締結された。

黒の王が徹底抗戦すべきだ、と反発したが赤の王が説得してくれた。赤の王が友情の証に握手を申し出たが黒の王は腕がブレード状なのでそれはできないと感じて代わりに赤の王の首元に腕を交差させて抱きついたような形になった

そんな光景を眺め、ブルーナイトは七王会議が何の滞りもなく終わると思っていた。

ブラック・ロータスが交差させた腕をスライドさせレッド・ライダーの首を斬り落とすまでは。

「《デス・バイ・ブレイジング》！！」

必殺技名と共にレッド・ライダーの首に 交差されていた剣がスライドし、その首が切り裂かれた。

レッド・ライダーあまりにもはあっけなく死んだ。

一瞬何が起きたのかその場の誰も理解できなかった。

「いやああああ！！」

悲鳴を上げたのは紫　の王だった。

「ラ…………ライダアアアア」

ほとんど同時にブルー・ナイトが叫んだ。

「ハア…………ハア…………」

ブラック・ロータスは息を吐くとほとんど独り言のように言った。

「あと4人だ…………」

あと4人殺せばレベル10になれる」

「よくも…………よくもライダーおオオオオオオオオ！……！」

ブルー・ナイトは雄叫びを上げながらブラック・ロータスに対して
剣を振るう。

攻撃を仕掛けたのはブルー・ナイトだけではなくた。

その場にいる全員が武器をとり、

殺し合いが始まった。

七王会議が行われてから約1時間後

シュウはコバルト・マンガンに対戦を申し込まれていた

「コバル、お前から戦いを吹っ掛けてくるとは珍しいな」

「……ランサー」

今日は戦いに来た訳じゃない

我が主、ブルー・ナイトからの伝言を言いに来た」

「伝言？」

「『ブラック・ロータスを見かけたら殺せ

例の武器を使っても構わない』と」

「……一体何があつたんだ？」

シュウが静かに尋ねる。

『例の武器』というのは強化外装^{ジ・アバター}のことだろう。

おそらく言っているコバルト・マンガンの方も例の武器というのが一体何を指しているのか分からないで言っているのだろう。

「穏やかな話じゃないな

少なくとも理由くらいは聞きたいんだが」

「……七王会議の場でブラック・ロータスがレッド・ライダーを殺

した

それも卑怯にも不意打ちによってな」

「なっ!？」

じゃあライダーは……」

「特別ルールに乗っ取ってポイント全損

加速世界から永久退場した」

「……………」

「残り五人の王は会議が終わってすぐにブラック・ロータスを裏切ら者として賞金首にした

つまりお前にも協力して欲しいということだ」

「ブルー・ナイトはどこにいる」

「主はいま忙しい

だから私が伝言に来た」

「ただか1・8秒ほど時間を貰うだけだ」

「……わかった」

コバルト・ブレードはブルー・ナイトのいるエリアだけ教えるとド

ロー申請によって対戦を終えた。

「で、キミはどうするの」

「ナイトに会ってくる

できればロータス本人に会いたいところだがおそらく無理だろ」

と言いながらシュウは家を出た。

あまり遠くないためシュウは自転車を漕いでポイントまで行くことにした。

「まあこんな状況になってるんだし生き残る事を考えたらおそらくグローバル接続そのものを切断してるだろうしね」

「ああ、そんな方法で対戦を回避できんのか

考えた事なかったよ」

素直に感心するシュウにパーティはのんびりと会話を続ける。

「戦闘バカのシュウには無用の知識だからね」

ま、はつきり言って探すという行為は時間の無駄でしかないね

それにしてもブラック・ロータスのやったことに対してあまり驚いてないみたいだけど」

「そうかね

冷静に見えて実はかなり取り乱してるんだけど」

「それダウト

キミはブラック・ロータスならそれくらいやりかねないと考えてるね」

「だからお前はしれっと俺の心を読むなよ

パーティ自身はどう考えてるんだ？」

「ボクが来てからシュウがこの数ヶ月でブラック・ロータスと戦った回数は10回ほどあるけど」

「そっぴいやお前が来てからあまりロータスとは戦ってなかったな」

「えーと続けるよ、とりあえず今までみてきた感じだと

うん、やりかねない」

（ライダーがポイント全損して永久退場したつつーのに冷静だな俺やっぱりレベル9の特別ルールをナイトから聞いた時にこうなる事が予想できていたのかな）

ややあってエリア内に辿り着いたシュウは即座に叫んだ。

「バースト・リンク!!」

そしてマツチングリストを開いて《ブルー・ナイト》のネームタグに対して対戦ボタンを押した。

「……コバルに伝言をさせたはずだが」

ブルー・ナイトは開口一番にそんなことを言った。

「ああ、コバルから話は聞いたぜ

その上でお前に会いにきた」

「全くコバルの役割が無駄になったじゃないか

で何をはなしにきた」

ブルー・ナイトはほとんど起伏のない声で言った

「その様子だとかなりキレてるな」

「お前はライダーを殺されたというのに随分落ち着いているんだな」

「別に薄情だという訳じゃないさ

俺だってライダーとはよく戦った仲だしな」

「ならどうしてそんなに冷静なんだ？」

「……レベル10になるための条件が存在し、レベル9の特別ルールが存在していた

これは起こるべくして起こった事だよ

ロータスはレベル10に上がる為の行動を行なったに過ぎない

非があるとするはこのルールを作ったゲームマスターにあると思うぜ」

「……こうなる事が予測できてたという事か」

静かに言うブルー・ナイト。

「まーね

誰かしらがやってただろ

だからさ……

ロータスの事を許してやれよ」

「できるわけないだろ!!」

ブルー・ナイトが叫んだ。

「お前の器ならそれくらいできるだろ

それにロータスだってな……

いや、本人不在でとやかく言うのもアレか」

「……」

ブルーナイトは押し黙るがシュウは話を続ける。

「それにロータスが不可侵条約に異議を唱えたのも分かる気がするぜ
平和な世界を作るよりも戦に身を投じる、大いに結構な事じゃない
か」

「……狂人の考えは狂人にもみ理解できるということか……」

ブルーナイトが口を開いてそんな事を言たがシュウは手を横に振り
ながら言った。

「いやいや、狂人呼ばわりはあんまりだろ

レベル9同士で戦って負けたら即終了ってのには同情はするがよく
考えてみる

平和な格ゲーってなんなんだよ

リアルでの平和は大いに結構

だがこの世界でも同じ法則が通用すると思うなよ

なんたってコレは格闘ゲームなんだぜ？」

「お前はどこまでも格闘ゲームとして楽しんでるな」

「ハッハッハ

結局俺は戦いが楽しめればそれでいいらしい」

「殺し合いですら楽しめるバーストリンカーは俺の知る限りお前くらいしか知らないけどな」

ブルー・ナイトが皮肉を言う。

「他の奴にも言われたよ

『キミは例え殺し合いだとしても嬉喜として行っ』ってな」

「ソイツが誰なのか知らないがソイツはお前の事をよく見ているな俺ですらこの前のクロム・ディザスター戦でのお前の姿を見てようやく確認できたというのに

で、お前がレベル9になったら俺を殺すのか？」

「多分俺レベル9にならないから

これは俺のワガママだよ

お前やロータス達との戦いが一回で終わっちゃうのがあまりにも勿体無いからな」

ニヤリと笑い答えるシュウ。

「ハハ、何言っただよ

ならお前は何の為に戦ってるんだよ」

「楽しむ為に決まってるんだろ」

ブルー・ナイトの質問にシュウは一秒も迷わずに答えた。

（コイツは本当にブレないな）

「あ、一応言つとくが俺だって好き好んで友を殺そうとは思わんよ
ロータスだって別に殺したくて殺した訳じゃないだろ

じゃ、とりあえず言いたいと言っただけで帰るわ」

そう言つとシュウからドロー申請がきた。

（こついうのって言い終わると同時にタイムアップで去る、とかじゃないのか）

最後の最後で締まりのないネイビー・ランサーに呆れつつ申請を受諾した。

（俺は……）

俺はいつかロータスを許せる日が来るのだろうか）

対戦を終えたブルー・ナイトは現実世界で月の光に照らされながらしばらく黄昏ていた。

「言うだけ言ってさっさと帰る」

「いやはやシユウはやることが違う」

家に帰ってきてから今まで黙っていたパーティが話してくる。

「ナイトなだめようとしてたのに気づいたら自分の言いたい事言ってたぜ」

まあナイトなら俺がとやかく言わなくてもどうにかってたかもな」

「ハア……」

キミは何の為にナイトと話したのかい？」

パーティが呆れたように言う

「きちんと用件は伝えたんだしいいじゃないか」

と、その時突然バシイイイイ！！

という音と共に加速状態になり対戦が開始される。

「あゝもう人がせつかく会話してるところなのに！」

（パティは人に分類されるのか？）

「細かいところは気にしない」

当たり前のように心を読んできたパティをスルーし、対戦相手を見る。

カラーは全体的に黒だがボディに赤いラインが入っていて、フルフェイスのマスクを着けている。

（えーと、見たことがない奴だな）

と思っていると相手の方が話かけてきた。

「私はネガ・ネビュラスの一員ですが、貴方をお願いしたい事があつてきました。」

女性の声だった。

「お願い？」

「ええ、

我々と一緒に四神と戦ってくださいませんか」

「……………え？」

第十一話（後書き）

おまけコーナー

シュウ「今回もおまけコーナーが始まるぜ」

パティ「前回の予告通り戦闘シーン皆無だね」

シュウ「まあな

ちなみに作者がこれまでに最も書くのに苦労した話だったりするんだ」

パティ「戦闘シーンもないのにどうして？」

シュウ「今回書いたのは七王会議の部分とその後の俺とブルー・ナイトとの会話なんだが……」

『正直どいう風に書けばいいのかわからなかった』そうだ」

パティ「アハハハ

なぜ書いた」

シュウ「七王会議のくだりは原作においてかなり重要な場所だったから少しでも書きたかったらしい」

でもってブルー・ナイトに関してだが七王会議の時レッド・ライダー

「が殺された時点で青の王が怒り狂ったと一卷にて黒雪姫が言っていた」

パーティ「ふむふむ

それで？」

シュウ「んでもって六巻にて七王会議が開かれた時にはブルー・ナイトとブラック・ロータスがものすごくフレンドリーになってた訳だが

『この間に何があった！？』と作者は思った訳であって……」

パーティ「いや、単に時間が解決したんじゃない……」

シュウ「そのあたりは分からない

が、作者はブルー・ナイトを説得する役に俺を使っただけで訳だ」

パーティ「原作的に不確定な部分を書くのって大丈夫かな」

シュウ「この際だから言ってしまうがその内ある程度の原作崩壊を引き起こす予定なので問題ない」

パーティ「うわ……

ぶっちゃけちゃったね」

シュウ「更にぶっちゃけると今回の話、正直やる必要あまりないんだよね……」

という訳で十話全般と十一話の最後の部分以外は流し読みしてしま
ってかまいません

連続投稿したのも一気に流し読みしちゃって構わないからだったり
するので」

パティ「更にぶっちゃけちゃったよ……」

で、最後に新キャラらしいのが登場したよね」

シュウ「おう

ちなみに新キャラはとあるゲームに出てくるある物を元ネタとして
るぜ

正直かなり原型を留めてないがな

（ボソツ）元が人間じゃないし……」

パティ「元ネタのゲームは次回明かすということだね」

シュウ「yes！

という訳でまた次回！」

第十二話

「……………なんか今シジンとかいう単語が聞こえた気がするんだが俺の聞き違いだよな」

「いえ、今から事情を説明します」

「本当に四神かよ……………」

「ええ、私自身は四神を見た事はないんですがやはり危険ですかね」

「とりあえず個人的には止めた方がいいと思うぜ」

で事情っていうのは？」

「私の所属しているネガ・ネビュラスのレギオンマスターであるブラック・ロータスが反逆により賞金首になった事はご存知ですか？」

「さっき知ったばかりかな」

でそれと四神に何の関係があるんだ？」

シュウが訝しげに尋ねるとその仮想体はすらすらと答えた。

「マスターはどうしてもレベル10になりたかった」

しかし他の王は襲撃を警戒しているため現段階通常の手段でレベル

「10に上がるのは困難な状況です」

「ま、あいつらも下手な行動はとらねえだろうしな」

仮想体の言葉にシユウも頷く。

「そこで我々ネガ・ネビユラスのメンバーは他の手段でマスターをレベル10にすることはできないか、と考えました」

「それで？」

「考えた後、至った結論があのだ帝城です
帝城には様々な噂が存在します」

「帝城の中には超強力な強化外装がある、とかか？」

「中に入る事ができた暁にはレベル10に上げれる、という噂もまた存在します」

「つまりあの四神倒して中に入りゃレベル10になれると？」

噂レベルでやることじゃねえと思うんだが」

「しかし我々は少しでも可能性があるならそれに賭けたい

そして私は少しでも成功する可能性を上げたいのです」

「戦力増加の為に俺をあたったってことか？」

「ええ、貴方は単騎で7大レギオン全てに乗り込んだり全ての王達と幾度と無く戦ったりとして有名ですからね

そして私の知りうる限りどこのレギオンにも属さず、かつここまでの無謀に挑めるような人間は貴方しかない

お願いします

どうか我々と戦って下さい」

仮想体は言いながら頭を下げた。

「一応聞いとくが誰かに指示されて俺をあたったのか？」

「いえ、私の独断です」

「やっぱりな、ロータスや四元素の連中が部外者に頼るなんて行爲をするとは考えられなかったからな」

「ええ、相談してたら間違いなく却下されてたでしょうね」

「それと帝城の潜入にロータス合意してんの？」

「四元素の皆さんが発案してロータス以外の全員が同意しました

ロータスにはまだ知らせていません

多分反対するでしょうから

だから明日無制限フィールドに集まった時に言います」

「アイツ仲間には優しいところあるからな」

「マスターの事をよく知ってるようですが仲はやはりいいんですか」

「まゝナイトの次くらいに戦ってるしな

というかナイトといいロータスといい強すぎるぜ

ロータス相手だと三回に一回くらいしか勝てないしな」

（マスター相手に3割勝てる時点で普通じゃないですよ貴方……）

仮想体は思ったが口には出さない。

「ま、考えとくよ

気が向いたら帝城に行くから時間だけ教えてくれ」

「分かりました

必ず来てくれると信じています

」

そう言っただけで彼女はシュウに帝城へ集まる時間を教える

「あ、部外者呼んだことバレたら後が怖いからある程度の覚悟はしとくんだな」

シュウが冗談めかして言うとな彼女は一瞬肩をビクッ、と震わせた。

「か、覚悟はします」

多分彼女は今頃冷や汗をかいているだろう、とシュウが思った。

「ま、会ったら適当なこと言っとくよ」

「お、お願いします」

では私はこれで」

彼女が去ろうとしたとき、シュウが尋ねた。

「おっと、今頃尋ねるのもアレだがお前の名前を聞いてなかった」

「申し訳ない！」

私としたことが自ら名乗るのを忘れるとは……」

彼女は本当に申し訳なさそうに言うと、一呼吸おいてから言った。

「私のアバター名は《ラクドス・ケルベロス》と申します

ケルベ、と呼んで下さい」

「【地獄の番犬】か……」

凄い名前をしてるな」

「実際ネガ・ネビュラスの門番みたいなことしてますからね

とはいえ私を突破した先にはかの四元素が控えてますがね」

ケルベが笑みを浮かべる。

「そいつは楽しそうだな

お前と今まで戦わなかったのが残念でならない」

「なら折角ですし今ここで戦ってはみませんか？

私も貴方の実力を試してみたい」

「まだ時間があったな

いいぜ、乗った」

シュウが言うと二人は一度距離をとった。

フレイ・ランス
「外装！ー！」

そしてシュウが強化外装を出したのを合図に戦いが始まった。

シュウはランスを構え、距離を縮めるため仮想体の方へと進む。

ネイビー・ランサーの動くと同時にケルベロスの体から何か野球ボール大の球体が飛び出した。

（見た目から予想してあれは多分……）

シュウが考えながら体を右へ傾ける。

瞬間、球体から閃光が放射され、シュウの頭のすぐ左を掠めた。

（やっぱりビットか！

厄介だな）

更に球体が光る。

シュウは前に進みながらも体を小刻みに動かしてビットからの攻撃を回避していく。

遂にネイビー・ランサーがケルベロスの攻撃範囲を捉える。

シュウは、ケルベロスの横っ腹に向かってランスをスイングする。

（貰った！！）

シュウがそう確信した刹那、ケルベロスが叫んだ。

「召喚^{サモン} 《アンカー・フォース》！！」

直後、振るわれたランスとケルベロスの間に割って入るように球体が出現した。

ガッキイイイイ！！

という音が鳴り響き、ランスが球体に直撃、ケルベロスも後ろへ飛

んだ。

シュウはチラツとケルベロスの体力ゲージを確認する。

（ダメージなしか

ありや吹っ飛んだというより自分から後ろへ跳んだな

それよりも……）

シュウは視線を球体へ向ける。

サイズはバスケットボール大。

色はオレンジ。

そして球体には鉤爪のようなものが三つくっついており、また球体から光る鎖のようなものが伸びていて、ケルベロスの腕に接続されていた。

（ありや 一体何なんだ？

ビット、にしちゃデカすぎる

その上強度も高い）

「この強化外装はビットの上位版とっていいですね
アンカー・フォース

私にとっては最強の矛であり最強の盾です」

（ビットの上位版だと！？

ってことは……）

シュウは横へ跳ぶ。

瞬間アンカー・フォースから赤いレーザーが放射され、直前までシュウのいた地点を通過する。

「避けましたか

ではこれでどうです？」

ケルベロスはレーザーが放射され続けるアンカー・フォースの向きをずらす。

レーザーが放射状に振るわれた。

周りの障害物が切断される。

「ちょ、火力と攻撃範囲が反則だろ！？」

シュウは叫びながら咄嗟にしゃがむ。

レーザーがネイビー・ランサーの頭を掠めた。

「今の攻撃もかわすとは、やりますね」

ケルベロスはアンカー・フォースをの高さを下げると今度は黄色いレーザーが二本放射されV字型を描く。

(どこに射って……ってうおおおお！?)

V字型に放たれたレーザーが真ん中を挟み込むように収束していく。

その中心にいるネイビー・ランサーがジャンプする。

(冗談じゃねえ……)

膝から下が切断されるところだった)

着地直後今度は青いレーザー二本、今度は真っ直ぐ放たれる。

「ちっ！」

横へスライドすることでレーザーを回避しようとする。

が、直進していたレーザーが途中で角度を変えてY字型を描きながら回避行動をとったネイビー・ランサーへ食らい付く。

「!?!」

ほとんど反射的にランスを前に出してレーザーを弾く。

「まさか私のレーザーを全てかわしきるとは……」

「ハア……ハア……」

伊達に戦闘積み重ねてきた訳じゃない

ほとんど勘でかわしてるようなもんだぞ」

「では私の元へ辿り着けますかね」

ケルベロスが言うとアンカー・フォースから赤いレーザーを放つ。

シュウがそれをスライドで回避しようとする今度はビットから攻撃が放たれる。

「チー!!」

シュウはランスを使いビットからの攻撃を弾き、またレーザーを回避しながら突き進む。

赤いレーザーの放射が終わったかと思うと次は青いレーザーが放たれた。

（あのレーザーはY字型に曲がる

つまり……）

「正面安置イイイイ!!」

シュウは構わずレーザーに対して直進する。

ネイビー・ランサーの目の前でレーザーが分裂し、両肩を掠める。

（ぐっ、まさかたったの一回で弱点を見抜くとは……）

青いレーザーは角度を変えて対象を攻撃するのだがアンカーフォースの目の前に立たれた場合のみ、正面に安全地帯が出来上がる欠点

が存在するのだ。

普段は敵から見て、ケルベロスとアンカー・フォースが対角線上にならないように配置、ケルベロスの正面が安置にならないようにしているのだが、今回は赤いレーザーを放射した直後だった為、穴を突かれたのである。

「おおおお!!」

ネイビー・ランサーとケルベロスとの距離が縮まる。

「くっ!!」

ケルベロスは黄色いレーザーを放射。

V字型を描く。

(今度は高めか……)

シュウはしゃがみ、そしてレーザーが収束するより先に必殺技名を叫んだ。

「《スタブ・グランス》!!」

レーザーが収束するより先に、低姿勢のままネイビー・ランサーの姿が高速でブレる。

「しまっ!!」

黄色いレーザーは一度放つと収束するまではモーションを停止させ

ることができず、またアンカー・フォースを動かすこともできない。
そして、

シュウはランスを突き上げドン、という音と共にケルベロスの胸に
巨大なランスが突き刺さる。

急所である心臓を貫かれたケルベロスの体力はみるみる内に減少し
ていきゼロになった。

「お見事……です」

胸の辺りにポツカリと穴が開いたケルベロスはそれだけ言うと倒れ
た。

【YOU WIN】

という炎文字が浮かび、対戦が終了した。

「お疲れ！

いやゝ頑張ったね」

パーティが労いの言葉をかけた。

「対戦見てたのか

てっきり寝てるものかと」

ちなみにAIであるパーティにとっての《寝る》というのは待機状態のようなものである。

「しかし格下相手に随分と苦戦したね」

「確かレベルは6だったはずだがどう考えてもレベル7級の力を持つてたぞ

とても格下とはいえたもんじゃないな」

シユウが手を横に振りながら言う。

「経験値的にはレベル7手前だったのかもね

あと多分あの火力はレベルアップボーナスのほとんどを攻撃力に費やしてるからだと思うんだよね」

パーティが分析する。

「代りに防御力が低かった……か

だからこそ必殺技一撃で倒せた訳だが」

「いや……心臓にあんな大槍が突き刺さったら誰でも死ぬと思うけど……」

突撃した時の衝撃波で体に空いた穴が更に拡大してたし」

神妙な顔をするシユウに対して、とどめを刺した場面を思い返した

パーティが呆れたように言う。

「でさ、結局行くの？」

四神倒しに」

「ああ

四神は果てしなく強いと聞いたが巨大レギオン全員がかりならもしかしたらいけるかもしれない」

「ま、ボクの力もあるしね

久々に活躍の予感！」

「できるだけ使いたくないが……相手が相手だしな」

「見せるの嫌だったら戦わなければいいのに……」

と言ってもキミに言っても無駄か」

まだ四神の恐ろしさを知らないシュウはかつてない強敵との戦いを楽しみにしていた。

第十二話（後書き）

おまけコーナー

シュウ「今回もおまけコーナーが始まるぜ

一度十二話を書き終えたが些細なミスで消してしまつて泣きそうになりながら一から書き直すハメになった作者の代理の橘修だ」

パティ「自己紹介が長いよ

久々の戦闘シーンだったよ」

シュウ「ああ、そうだったな

で、俺と戦った《ラクドス・ケルベロス》の元ネタは「R-TYPE」というゲームに登場する《R-13A/ケルベロス》という戦闘機だ

これをアバター風に見してみた

余談だが元のゲームだと『地獄の番犬』ではなく『黒き森の番犬』なのであしからず」

パティ「それはそうと強化外装も、元々戦闘機のケルベロスに装備されてたものだったりするよね

あと戦闘機からアバターに変更つてこれもある種の擬人化というもののかな？」

シュウ「多分ね」

ちなみに作者としては人間をアバターにするより元々メカメカしい戦闘機とかの方がアバターとして想像しやすいそうだし

それとキャラの性格は完全にオリジナルだし

パティ「ところでボクもキャラ自体はオリジナルだったね」

シュウ「《パティ》というAIの名前と性格はな

強化外装の名前と外観の方は前にも言ったが元ネタありだ」
ジ・アバター

パティ「そうだったね」

話は戻るけど名前の『ラクドス』っていうのは？」

シュウ「赤と黒の混合って意味だ」

と言ってもほぼ完全に黒で赤いラインが少し入ってるだけなんだがな

ここで少しラクドス・ケルベロス（以下ケルベ）について補足だがケルベのカラーはほとんど黒だが属性上では赤と黒の混合という扱いだ

故に赤系統の遠距離型のアバターといえる」

パティ「ビット出したりレーザー飛ばしたりしてたもんね」

シュウ「それと火力が高いが、かわりに防御力がかなり低い

それと余談だが実は書き直す前と後では戦法が違っただぜ」

パティ「なんで変えたの!？」

シュウ「作者の気まぐれ

ちなみに書き直す前の戦闘ではレーザーは赤いのしか使わなかったんだぜ

そのかわりアンカーフォースならではの戦法をとった訳だが……

まあそれは機会があつたらということだ」

パティ「ふむふむ

ところで技は全部元のゲーム再現するつもりかな」

シュウ「いや、いろいろ技を加えるそうだ

だから元々使えないはずの攻撃を当たり前のように使ったり、また作者が考えたオリジナルの技を使ったりするかもしれないので生暖かい目で見てください」

パティ「それではまた次回!」

今後も何かのゲームやアニメを元にしたキャラが登場すると思いますのでご了承ください by 作者

第十三話

七王会議のあった翌日。

ネガ・ネビュラスの一員は無制限フィールドに集っていた。

そして皆で四神を倒してブラック・ロータスをレベル10へ上げよう、という計画を告げる。

ブラック・ロータスは『危険だ』と言って断固して反対したが皆はブラック・ロータスを置いてスタスタと帝城へと歩き出してしまった。

ブラック・ロータス も仕方なく、しかし どこか吹っ切れたように皆についていった。

一同は帝城前へと辿り着き、最後のミーティングを始める。

「わたしは四神スザクの元へ向かうのです」

同じ炎属性なら攻撃を受け止められるのです」

ネガ・ネビュラス四元素の一人であるアーダー・メイデンが 声を出す。

「私もスザクの元へ向かいましょう」

遠距離型なので向いているでしょうし」

ケルベロスもまた意見を出した。

「なら風を司る私はビヤッコですね」

四元素の一人、スカイ・レイカーの声。

「私もビヤッコの相手をしよう」

ネガ・ネビュラスのレギオンマスターにして黒の王、ブラック・ロ
ータスが言う。

「しかし他のビヤッコのメンバーが少ないのです」

アーダーメイデンが言うとネイビー・ランサーが意見を出す。

「ならば俺もビヤッコの元へ向かうとしよう」

レベル8オーバーが3人だ、これで文句あるまい」

「それでいいんじゃないかな」

「うん、僕もバランスがとれてると思うよ」

「ランサーさんなら申し分ないでしょう」

レギオンの皆が賛同的な意見を出す。

「よし、ではこのメンバーで四神に挑む！

……って」

ブラック・ロータス が言ってからその場の全員がネイビー・ランサーを凝視する。

「……………え?」「……………」

「ん?」

シュウはまるでなぜ自分が注目されてるのかわからない、とでもいうような反応を返す。

「き、き、貴様何故ここにいる!?!」

ブラック・ロータス が声を上げた。

「偶然通りがかったら何か面白そうな事をやろうとしてたから混ぜてもらおうかと思って」

シュウは何の気なしに言うがレギオンメンバー全員が臨戦態勢に入る。

「オイ、待て、俺は敵じゃねえからとりあえずこっちに向けてる武器をしまえ!!」

全員の代表としてスカイ・レイカーが言う。

「敵でないという証拠はあるんですか?」

「流石に単身でこの場に乗り込む馬鹿はいないだろ

……ってなんで皆技使う準備してんの!？」

アーダーメイデンがため息をつきながら言う。

「ハア……」

あなたならそれくらいの無茶苦茶をやりかねないからなのですよ」

スカイ・レイカーもまた言う。

「百歩譲って彼が協力してくれるとして、その理由が見当たりませんからね」

ケルベロスがフォローを入れた。

「彼なら四神と戦かいたいというだけで来ると思いますが」

「いやいや、流石に戦いたいというだけで協力する訳ないじゃないか」

という、シュウの予想外のセリフ。

「じゃあ何が目的のですか？」

「いやね、お前らは帝城の中に入る事ができれば中にレベル10に上がる手段がある、という説を推してるみたいだが個人的には強力な強化外装……恐らく七星外装が眠っていると予想している訳だが

レベル10に上がる手段があった場合ロータスがレベル10になればいい

強化外装があつたら俺が貰う

以上だ」

「なるほどな

無償で協力してくれるよりは信憑性がある」

ブラック・ロータスが頷く。

「で、その条件でいいのか？」

「ああ、もとより強化外装が目的じゃないからな」

ひとまず話がまとまる。

と、スカイ・レイカーが尋ねる

「ところで貴方は一体誰に聞いてここまで来たのかしら？」

「え、俺はふらつと通りがかつただけだぜ？」

「何の情報もなく1000分の1に圧縮された時間の中でネガ・ネビュラスのメンバーが集まるこのタイミングでどうやって帝城にふらつと通りすぎる事ができるのか詳しく教えてくれませんか？」

ニッコリ

「そのケルベロスさんから教えていただきました」

シュウがケルベロスの方を指さす。

指しながらケルベロスとアイコンタクトを交わす。

「ごめん、誤魔化すの無理だった」

「無理だった、じゃないですよ!？」

なにバラしちやてるんですか!？」

「ケルベ、後で特別訓練をしてさしあげましょう」

「……はい」

ケルベロスは泣きそうな声を出して言った。

ネガ・ネビュラスのメンバー（その他約一名含む）は四つの班に別れ、それぞれの門へと歩き出す。

そんな中シュウはパティと脳内で会話をしていた。

「それにしてもボクという存在がありながら他の強化外装に手を出すとはね……」

パティが平坦な声を出す。

「いや、アレだよ」

手に入れられるものは手に入れておいた方がいいじゃん？

そもそも帝城にあるとは限らないんだし」

「そもそも四神に勝てるかも分からないんだし

ボクがいなかったら勝つのは無理なんじゃないかな？」

パーティがムスツとして言う。

シュウは内心で嘆息しながら言った。

「お前の事を頼りにしてる

だから俺と共に戦ってくれ」

「誠意が足りない！」

(いや、誠意って言われても)

パーティは黙っているの、仕方なく息を吸い込み、

「お前だけが頼りだ！！」

俺と共に戦ってくれ！！！」

と叫んだ。

「そこまで言われたなら仕方ない

ボクに任せろ！」

エヘン、と偉そうに言うパーティにシュウはげんがりしながら思った。

（しかし強化外装に妬くAIって何なんだよ……）

「ランサーの奴、何を一人で叫んでるんだ？」

ブラック・ロータスが訝しげにシュウを見る。

他のメンバーも首を傾げていた。

（ランサーはともかくとして……

そろそろ時間か）

全員が持ち場に着いたはずだ。

時間を確認する。

時間が刻一刻とせまり、そして、

「全員、突撃！！」

ブラック・ロータスが叫ぶと同時にシュウ達は橋へと突入した。

全員が駆ける中、前方に見える台座から巨大なエネミーが出現する。

(コイツが四神ビャッコか!!)

「ヴオオオオオ!!」

ビャッコは帝城への侵入者を見つけると 雄叫びを上げて襲いかかってきた。

「うわああああ!!」

最前列を行っていた仮想体がビャッコの鉤爪で切り裂かれ、断末魔と共に爆散した。

しかしビャッコが他の仮想体を攻撃している隙にブラック・ロータスゲイル・スラストを乗せたスカイ・レイカーが強化外装を使い、ビャッコの元まで直進する。

ブラック・ロータスが離れ、そして剣に赤い過剰光が迸る。

「《オーバードライブ》!!」

《モード・レッド》!!」

剣が伸び、槍のように変化する。

「《奪命撃》!!」

放たれた赤い光線がビャッコの首筋を貫く。

ダメージエフェクトがビヤッコに刻みつけられ、僅かにだが確かなダメージが入り、ビヤッコの攻撃対象がブラック・ロータスへ設定される。

と、攻撃対象からはずれている他のメンバーが攻撃を仕掛ける。

が、ビヤッコはその巨体を動かし、仮想体を踏み潰し、また鋭利な牙で噛み千切りられていく。

メンバーが次々と力尽きていった。

戦線の少し後ろにいたシュウがその光景を目の当たりにする。

（クソ！！）

出し惜しみなんてしてる場合じゃねえ、ジ・アバターも心意も最初から全開でいく！！）

「ジ・アバター
外装アアア！！」

黒い球体が出現する。

瞬間、ビヤッコがこちらを見た。

いや、正確にはシュウの出したジ・アバターの方が。

「なっ！！」

シュウは一瞬息を詰まらせるが、我に帰ると瞬時にジ・アバターをランスへと変形させる。

ネイビー・ランサー がランスに変形させたジ・アバターを構え、対峙したその瞬間、確かにこちらを見たビャッコが言葉を発した。

禁じられた武器を使う者よ

我が神罰を受けよ

（喋った、だと！？）

シュウが思ったが直後、ビャッコの動きが変わった。

圧倒的な速度で動くと、周りの仮想体を全て無視してネイビー・ランサーに襲いかかった。

「なに！？」

ビャッコのあまりにも予想外の出来事にブラック・ロータスは状況が理解できなかった。

（馬鹿な！？）

ランサーはまだ攻撃をしていないぞ！？）

それ以外にもビャッコが喋ったこと、そして禁じられた武器、そしてランサーが出て、ランスへと変形させた謎の黒い球体。

分からないことだらけだった。

それは当事者たるシュウも同じだった。

（っ！！）

何がどうなつてやがる！？

禁じられた武器だと？）

「シュウ、避けて！！」

パーティがシュウの脳内で叫ぶ。

「おおおおおお！！」

シュウがビャッコの前足の間をすり抜け、腹の下をくぐる。

そしてネイビー・ランサーの握っているランスから過剰光が迸る。

「……《ガトリング・ブラスト》！！」

ランスによる連続突き。

攻撃威力拡張の心意により爆発的な攻撃力を得たランスから秒間5発の勢いで4秒間、計20発の連続突きが放たれた。

ビャッコの腹に幾つもの大穴が空き、五段織りの体力ゲージが一気に二本分が消し飛んだ。

（何が神罰だ

あと一セットと半分同じ攻撃をぶちこめばこっちの勝ちだ!!)

シュウがそう思った刹那、ビャッコの姿が高速でブレた。

通常の回避行動ではかわしきれないと感じたシュウがもう一つの心意、《移動能力拡張》を使い、動こうとする。

が、シュウが動くより先にビャッコの爪がシュウの体を捉えた

(うそ……だろ……)

行動を許さないほどの速度にシュウは驚愕し、直後体が引き裂かれた。

気づくと視界がモノトーンへと変わっていた。

(どうやら俺は死んだらしいな……)

見渡すと周りは死亡エフェクトがあちらこちらに点在し、生き残っているアバターは存在しなかった。

(チクショウ

これだけの数で攻めて、これだけの力をもつてしても四神の一体にも敵わないのかよ!!)

部隊は全滅。

作戦は失敗に終わった。

しかしネガネビユラスの一員ではない彼にとっては作戦の失敗成功などどうでもよかった。

心意を使い、ジ・アバターの力を使い、己の全てを尽くしてもなお目の前の敵に敗北したことがただ悔しくて仕方なかった。

「シュウ……」

大丈夫？」

パティが話しかけてきた。

「お前の力を借りたのに負けちゃったよ

すまない」

「なんで謝るの？」

「お前に敗北を味あわせちゃったことに謝ってるんだよ

単に俺が力不足だっただけなんだ」

「別にボクは気にしてないよ

それにシュウは弱くなんかないよ

相手があんなんじゃないしね」

パティはのんびりと言う。

（仕方ない……………か）

シウはモノトーンの世界をぼんやりと眺めながらビヤッコとの戦いを思い返した。

そしてビヤッコの動きがいきなり変わったときの事を思い出した。

「そついやアイツ、ジ・アバターを見たときから様子が変わらなかったか？」

「ボクの推測だけどアレはジ・アバターのような規格外の強化外装で攻めてきた時の為の防衛システムとしてステータスが上昇するんじゃないかな」と

「たしかアイツ俺の事を『禁じられた武器を持つ者』とか言ってたな
そもそも四神が喋るなんて話は今まで聞いたことないんだが禁じられた武器ってジ・アバターのことだよな……」

結局ジ・アバターって何なんだ？」

「ホント大した存在じゃないんだけどな……」

別に知ったところで何かが変わる訳でもないんだけどね、

それでもやっぱり知りたい？」

「ああ、お前の事を知っておきたいんだ

相棒としてな」

「むづ……」

そこまで言われたからには話しざるをえない」

四神のすぐ側で死亡し、極限状態に陥っている事もわすれてシユウはパティの言葉に耳を傾けた。

パティが話し始める。

「強化外装『ジ・アバター』というのはね……」

神器のなりそこないなんだよ」

第十三話（後書き）

おまけコーナー

シュウ「今回もおまけコーナーを始めるぜ」

パティ「出番が多いのはいいけどいつまでゲスト出さない気？」

シュウ「次回にはきちんと出す」

パティ「予告したからには次回ちゃんと出してよ？」

シュウ「わかつとる」

じゃあそろそろ内容に触れるかな」

パティ「よっしゃー！！」

じゃあまずはネガ・ネビュラスに関してかな」

シュウ「遂にブラック・ロータスを始めとする原作の主要キャラが登場したぜ」

パティ「十三話にしてようやくだね

しかもシュウは四神戦という旧ネガ・ネビュラス最後の戦いに部外者なのに参加するという無茶苦茶な内容だし」

シュウ「四神戦に俺を参戦させたのは単に作者がやりたかったからだ」

パーティ「やりたい放題だね……」

シュウ「次いこうか……」

パーティ「じゃあ次！

ただでさえ絶望的な強さをもつ四神が更に強くなった件についてだね」

シュウ「ああ

まず強くなったのはビャッコだけであって他の四神にリンクして四体全てのステータスを強化、なんてことはないのであしからず」

パーティ「というかそれがあつたら他の四神に挑んだ部隊にとっては大迷惑とかそういうレベルじゃないよね

それでなんで強化なんかしたの？

元からして強いのに」

シュウ「いや、まあ原作のスザク戦で、有利な条件を整えたとはいえブラック・ロータスがスザクを撃破一步手間まで追い詰めてたのをみて、『これシュウがジ・アバターの力使ったら勝っちゃうんじゃない……』という懸念が作者の中に生まれてな」

パティ「確かにクロム・ディザスターに圧勝するようなチート武器だしね」

シュウ「という訳でジ・アバター使ったら更に強くなるようにしてみたそうだ

次いくぜ

ブラック・ロータスと俺の関係に関して」

パティ「今まで特にブラック・ロータスには触れてなかったけど仲いいの？」

シュウ「書く場面が今までなかったが仲はいい設定だ

あとよく戦ってる設定だぜ

ブラック・ロータスと俺との戦闘シーンはいつか書くかもな」

パティ「ふ〜ん」

シュウ「じゃあ次だぜ

俺の心意使用に関してだ」

パティ「心意の使用は今回が初めてだったね」

シュウ「まあ使う機会がなかったからな

ちなみに作者的には青系統は属性にもよるが基本威力拡張の心意がほぼ確実に使用可能で移動能力拡張と防御拡張のどちらか片方（場合によっては両方）が使用可能だと考えているらしい

で攻撃範囲拡張は青系統の近接型という特性上基本的に使用不可能だと考えている」

パーティ「攻撃範囲拡張の心意が使える青系統がいてもいいと思うんだけどね」

シウ「属性と相反する心意は原則使用できないからな

だがあくまでも『基本的に』使用不可能なだけであって逆に言えば属性次第では青系統でも攻撃範囲拡張が使用できる可能性があるといえるな

世の中には近接型の赤系統が存在するぐらいだし」

パーティ「ま、その某バーストリンカーもそのうち登場するかもね

ま、今回はこんなところかな」

ちよっと長くなっちゃったけどまた次回！」

第十四話（前書き）

忙しくて投稿が遅れてしまいました。 申し訳ないb y t i z

i
n

第十四話

「《ジ・アバター》が神器のなりそこないだと？」

帝城の西門前。

シュウはそこでパティの言葉を聞いていた。

「うん

神器は全て名前の前に『The』の文字が付く

そこで気づいてよかったかもね」

パティのセリフにシュウは反論する。

「仮に神器の仲間だとしてもなりそこないってことはないだろ！？」

「別に弱いからなりそこないと決まる訳じゃないよ

以前ボクはジ・アバターが失敗作だと言ったよね」

「初めてジ・アバターを使った後に言ってたな

俺にはジ・アバターが失敗作だとは思えないがな」

シュウが数ヶ月前を思い返しながら言う。

「これは兵器としてなら実によくできた強化外装だよ

だけど格闘ゲームに於ける『対戦』として使う武器としては失敗作なんだ

どうしてか分かるかい？」

「……………強すぎるからか？」

少し考えてシュウが思った事を口にするとパティは肯定した。

「正解だよ

ジ・アバターはあまりにも強すぎた

ゲームバランスを破壊してしまう程にね」

「ただでさえゲームバランスが崩れかけてる神器を一方的に破壊するレベルだもんな…………」

（ジ・インパルスもそうだがあのクロム・ディザスターも、元々は神器の一つだったと聞いた事があるしな…………

アレに単騎で勝ったと思うと恐ろしい）

シュウは改めてジ・アバターの驚異的な性能を認識する。

「だからジ・アバターは破棄されるハズだったんだけど…………

どういう訳か地下深くに封印され、更に何故か地下深くにあるが故に誰も立ち入れないハズの場所にキミが来たんだよね」

「その辺はパーティにも分からないのか？」

「実は記憶データの一部が凍結したままなんだよね」

解凍手段がないし」

「そんなん聞いてねえぞ!？」

「言っていないからね」

パーティの記憶の一部が凍結していたことに驚くシユウに対して軽い調子で言うパーティ。

（何はともあれビヤッコがジ・アバターを『禁じられた武器』って言ってたのは本来破棄されるはずのゲームバランス破壊兵器だったからという訳か……）

何故四神がジ・アバターの事を知っていたのかは分からないがとりあえず事情は理解したシユウは復帰までの時間を確認する。

「残り10分で蘇生か……」

そろそろ復帰後の帰還方法考えないとな」

部隊が全滅した場合各自で退避する事になっている。

ちなみに他の部隊も全滅したらしくシユウ達が削りとったビヤッコの体力ゲージは非戦闘状態になった四神の支援で完全に回復していた。

「なんか方法があるのかな？」

「ジ・アバターの身体能力上昇効果に頼りたかったが相手まで強化されちまうんじゃない……」

まあ移動能力拡張の心意を使えば何とかなると思っぜ」

「まあ何回か死ぬかもだけどね」

パティがさらつと言う。

「まあ覚悟はしとくさ」

それから時間が過ぎ、死亡してから60分が経過したときネイビー・ランサーが蘇生された。

ジ・アバターは締まった状態なので四神は元の状態に戻っているようにネイビー・ランサーはターゲットに指定されてないようだ。

代りに門の最奥部にいるスカイ・レイカー及びにブラック・ロータスゲッターとして指定されていた。

（馬鹿かアイツ等！？

あんな場所にいたら無限EKに陥るぞ！！）

しかしシュウは瞬時に二人の目的を見抜いた。

他のメンバーを逃がす為にビャッコに捕捉される事でビャッコを後

るへ引っ張っているのだ。

目的通り他のメンバーが全力で門から離れていく。

「チッ」

シュウは少し考えそして走り出した。

ビヤッコに向かって。

「ちょ

なに考えてんの!？」

「放っておけねえから助ける!」

シュウはビヤッコの懷に飛び込むと強化外装の名前を叫んだ。

「外装 《ジ・アバター》!」

ジ・アバターを出し、再びランスへと変形させる。

そしてビヤッコの腹にランスを突き刺さした。

ビヤッコが悲鳴を上げた。

「何を考えているんですか!?!」

スカイ・レイカーが叫ぶとシュウが言う。

「助けに来てやったぜ

俺の気が変わる前にさっさと逃げな」

そしてまたビヤッコの声が聞こえる。

再び禁じられた武器を使う愚か者よ

滅びよ

「滅んでたまるか!?!」

本来であれば四神のステータス上昇効果によりパワー負けして体を振り回されるはずだった。

しかしシュウは腹にランスを突き刺さしたまま動かない。

シュウはビヤッコのステータス強化にはムラがある事を見抜いていた。

ネイビー・ランサーの体が引き裂かれた時、他の仮想体が引き裂かれるのと同じような傷を残して死んでいた。

もし全てのステータスが上昇するならば体が引き裂かれるどころかバラバラになっていてもおかしくなかった。

（ビャッコの奴は攻撃力に関してゲームシステム上のダメージ量こそ上昇させてるがダメージフェクトや腕力そのものは変わっていない）

丁度ステータスのパラメーターだけをいじったようなもんだな）

要するに力比べではジ・アバターにより身体能力が強化されたネイビー・ランサーの方にも分がある。

更にシュウは心意のイマジネーションにより身体能力の内の速度と腕力を強化できる。

パワー特化型のアバターであるネイビー・ランサーにジ・アバターの身体能力上昇効果、更に攻撃力拡張の心意の応用として腕力などの身体能力そのものを上昇させる。

ビャッコはジ・アバターに対応するためステータスのパラメーターが上昇するが腕力による単純な力勝負には意味をなさなかった。

「お……………おおオオオオオオオオ！！」

結果、懷に飛び込み腹にランスを突き刺さした状態で力が拮抗する。

四神の動きを一人で止めるという信じられないような状況が目の前

に広がる中でスカイ・レイカーは心意の力でゲイル・スラストアの
ゲージを高速でチャージさせる。

「……行きますー!!」

スカイ・レイカーはブラック・ロータスを抱き抱え飛び立つ。

スカイ・レイカーとブラック・ロータスの姿が小さくなっていく中、
ビャッコの動きを止め続けているシュウにパティが話しかける。

「でカッコつけて助けたはいいけどキミはこの状況でどうするのか
な？」

「……一旦死ぬ

もう腕がもたねえや」

シュウが言った直後遂に力の均衡が崩れシュウの手からランスが離
れ、遠くまで吹っ飛ばされ、襲ってきたビャッコに噛み砕かれて死
んだ。

再びモノトーンの世界へと戻る。

「一回の戦闘で二度死ぬなんていつぶりだっけな」

「キミは馬鹿みたいなことをするな全く……」

パティが呆れて言う。

「で、脱出手段だけど」

そしてパーティが言いかけてシュウが気にしていたことを言う。

「というかランスに変形させたジ・アバターがビャッコに刺さったまんまなんだけどお前よく喋れるな」

「それなら大丈夫

確かにボクの本体があるのはあのジ・アバター内部だけ強化外装としてシュウが所有している限りはボクの意識が離れることはないから」

「どこまでも運命共同体ですかそうですか」

「というよりはもう既にボクはキミのニューロリンカーのシステムの一部として殆ど同化してるも同然なんだよね」

シュウが投げやりな事を言うパーティがなんかともない事を言ってきた。

「オイ、マテ、聞いてねえぞー!!」

「まあまあ

AI搭載型ニューロリンカーとして使えばいいじゃないか」

「お前のようなAIが搭載されたニューロリンカーがあつてたまるか！」

「アハハ

シユウと話していると退屈しないな

まあそんな事より脱出手段考えた方がいいかもね」

笑いながら言うパーティにため息をつきながら言う。

「俺にとっではどうでもいいことじゃないんだが……

まあ今は置いておくとしてさっきと同じ方法でいいんじゃない？」

「ジ・アバターに頼らず移動能力拡張の心意を使って脱出、って手段？」

パーティが確認をとる。

「ああ」

「別に構わないけどさっきより距離がはなれてるから無傷とはいかないと思うよ？」

「他に方法ないからな」

「考えなしに突っ込むからこういう事になるんだよ」

「勢いでやってしまったことは仕方ない

とにかく逃げるぞ」

そして60分が経過。

復活した瞬間ネイビー・ランサーの両足から過剰光が溢れる。

そしてネイビー・ランサーの体が高速でブレる。

ただ加速するだけならシュウにとって技名は不要だった

（とにかく速く前に進む！！）

ビャッコはネイビー・ランサーを追いかける。

（さすがに持久力が違うか……）

心意といえども無限に使用できる訳ではない。

精神力を削りながら心意を使う訳であり、精神力が消耗されるほど速度が低下していく。

「こんちくしょおおお！！」

遂にビャッコに追い付かれたシュウは背中を鉤爪で引き裂かれて死んだ。

シュウは死亡エフェクトとなり一時間を精神力の回復と精神集中に使い、蘇生直後再び移動能力拡張の心意を使い、遂に帝城からの脱出に成功した。

「死ぬかと思つた……つか三回死んだ」

「正直三回中二回は無駄死にじゃなかったかな」

最初は仕方ないとして二回目は自分からビヤツコに突っ込んでいき、突っ込んで出口までの距離を離さなければ逃げる途中で死ぬこともなかったし」

パティがおちよくるように言う。

「む、無駄死になんかじゃないぞ

ロータスとレイカー助けたし」

「はいはい（ま、スカイ・レイカーの力があれば自力でブラック・ロータス連れて逃げられたかもしれないけどね）」

シュウの反論に対してパティは心の中でそう思ったが口には出さず軽く流した。

と、ブラック・ロータスがシュウの元に来て尋ねた。

「なんで私を助けたんだ？」

「いつもドンパチやり合つてる仲だがそれでも友だろ？」

「忘れたのか？」

私はライダーを殺したんだぞ」

「ライダーは俺にとっても友の一人だったがよ……」

俺がお前にとにかく言う権利はねえよ」

ブラック・ロータスは重々しく言ったがシュウは別段気にする風でもなく軽い口調で言った。

「そうか……」

ブラック・ロータスはそれだけ言うと黙った。

「さて、俺は帰るかな」

次に会った時はまた戦おうぜ」

シュウは笑いながら言うのとポータルへ向かって歩いていった

（ランサーには悪いが私が再び戦う日は恐らくこないだろうな……）

ネイビー・ランサーの消えた方を眺めながらブラック・ロータスは自然とそう思った。

ネイビー・ランサーがその場からいなくなっただけでしばらくして、入れ替わるようにケルベロスがブラック・ロータスの元へやってきた。

「マ、マスター……」

満身創痍のケルベロスはブラック・ロータスの元へ駆け寄る。

「ケルベ、スザクに挑んだメンバーはどうなったのです?」

スカイ・レイカーが尋ねる。

「一人を除いては帰還しました

ただ……メイデンが私達を助ける為に……」

ブラック・ロータスとスカイ・レイカーはアーダー・メイデンが一体何をしてどうなったのかを悟った。

アーダー・メイデンはスザクから他の仲間を助ける為に門の前までスザクを引っ張っていった。

そして橋の最奥部で力尽きたのだろう。

「考える事は皆同じ……か」

その後も《アクア・カレント》と《グラフィット・エッジ》がそれぞれゲンブとセイリユウに囚われ、半ば封印状態になっているという報告を仲間から聞いた。

さらにその仲間達も脱出する為にかなり死亡したためもはやレギオンとして存続する事自体が不可能になった。

「そうか……」

フフ、これが私が招いた事の顛末か……」

ブラック・ロータスは独り言のように呟いた。

この日、黒のレギオン、《ネガ・ネビュラス》は消滅し、この日を境にブラック・ロータスは加速世界から姿を消した。

第十四話（後書き）

おまけコーナー

パティ「おまけコーナー、開始！」

シュウ「早速ゲストを出すぞ！」

という訳で久々のゲストは《ネガ・ネビュラス》四元素の一員である四楚宮謡だ」

【UIくよろしくなのです】

シュウ「解説入るぜ

橋からの脱出からだな」

【UIく原作では自力で脱出できてたのです】

パティ「つまり無駄な行為だよね」

シュウ「おい止めろ

俺が無駄に突っ込んで無駄死にしたみたいじゃないか」

パティ&謡「……」

シュウ「頼むからなんか言ってくれ！」

【UI<ま、まああれなのですよ

他のメンバーもあまり死なずに逃げきれた分きちんと役割を果たしたのですよ】

シュウ「なんかフォローが身に沁みる……」

パティ「ま、シュウも参ってるし次の話題いこうか

という訳で次は《ジ・アバター》についてだよ」

【UI<今回でジ・アバターの事が少し分かったのです】

シュウ「簡単に説明すると神器の一つとして作られたが強すぎて封印されたチート兵器って事がわかったな」

パティ「ちなみに記憶の一部凍結はただのご都合主義だったりするんだよねー

あと失敗作発言は第四話参照だよ!」

シュウ「またお前はメタな発言を……」

まあそういうコーナーだからいいんだけど」

【UI<では凍結された記憶データについてはいつかでてくるのですか?】

パーティ「作者が付けたご都合設定みたいなものだしね」

ま、記憶の内容がどうあれ後に出るんじゃないかな」

さてと、ボクについてはこれくらいにしてとりあえず本編の現状の確認をしないとね」

【UI「私達のレギオンであるネガ・ネビュラスが四神に挑んで敗北したところなのです」】

シュウ「今回で四神戦が完結したから残念ながらもしくネガ・ネビュラスのメンバーの再登場はないぞ」

【UI「ネガ・ネビュラスが解散して二年くらいは皆ひっそりと生きてきましたから次の登場は二年半後なのです……」】

シュウ「まあそう悲観するな」

四神戦から原作一巻の時間軸までの二年半の間は原作では触れられていない空白期間だから恐らく途中で一気に時間を飛ばしながら書くことになる

そんな訳だから作者は今のところ十話分くらいを目安にこの空白期間の二年間を書くつもりらしい」

パーティ「まだ未確定だから本当に十話前後でいくかは分からないけどね」

でもそれくらいのペースで書かなきゃいつになったら時間軸が一巻に辿り着けるか分からないよね」

シュウ「ま、そういう事だ

とまあ今回のおまけコーナーはここまでで次回予告は謡が頼んだ」

【UIくえーと

次回は今回とはまた違う原作キャラが登場するらしいのです】

パティ「お楽しみに!!」

シュウ「いや、お前が締めるなよ」

第十五話（前書き）

忙しくて投稿が遅れてしまいました。申し訳ない
b y t i z i n & s u d o u

第十五話

ブラック・ロータスは会議の場で赤の王であるレッド・ライダーを殺害し、永久退場させた罪により加速世界に於ける最大の賞金首になった。

その事が公表された日、黒のレギオンは人知れず帝城に侵入する為四神に挑み、そして敗北、レギオンは解散、賞金首たるブラック・ロータスは姿を消した。

そんな事があってからが2日後。

「今頃バーストリンカー達は血眼になってブラック・ロータス探してるんだろうな」

朝、ベッドの上に転がっているシュウはパティに対して思考音声を流す。

「多分無駄な行為なのにね」

「ニューロリンカーのグローバル切断、だったか」

そんな方法とってんだったら確かに無駄な行為だがよ

本当にそんな方法とってんのかね？」

「さ〜ね」

パーティは興味なさげに答えた。

シュウはベッドから起き上がると顔を洗い、朝食の用意をする。

「しかし今日は学校が休みだというのに随分早起きだね〜」

「今日はやることがあるからな」

最近いろいろありすぎてセルフイ放置してたし」

シュウがそう言っている間にパーティはシュウの心を読むことで彼が何をしようとしているのかを知る。

「ふむふむ、今日は楽しい事になりそうだね」

（何が『ふむふむ』なんだか）

心を読まれてる事に気づいていないシュウはパーティの解ったふうな素振りを疑問に思いつつ朝食のパンを食べる。

昼前にユミはネイビー・ランサーとの集合場所として指定した練馬区の某所へ赴いた。

集合時間に加速。

マッチングリストから《ネイビー・ランサー》の名前を選択。

対戦がスタートする。

「よっ、久しぶり」

ネイビー・ランサーがユミをみつけて気軽に挨拶をする。

「久しぶり、じゃなくてわたし、ブラック・ロータスが賞金首になったって昨日聞いたんだけどランサー知ってた!？」

「そんなこと三日前から知っとるわ」

ユミは興奮したように言うが、七王会議当日に話を聞かされ、その上二日前に当事者に会ったシュウにとっては今更感満載だった。

「それって事件当日じゃない!？」

公表されたの二日前だったわよね!？」

「あ、そうなの?」

「そうよ」

でそれ以降ブラック・ロータスは姿を見た者は一人もいないらしいけどランサーは見なかった?」

ユミはネイビー・ランサーに尋ねる。

「一昨日会ったつきりだ」

「一昨日!？」

「一体どこで？」

ネイビー・ランサーの何気ない返答にユミは驚愕しながらも 所在を尋ねた。

「別に話したところでブラック・ロータスを捕まえるのは無理だと思っぜ

そもそも仮に所在が分かっても捕まえて賞金を取る気が俺にはない」

シュウの言葉にセルフイは少し驚いたようだった。

「い、意外ね

てつきり全力で戦うものとはかり」

「ま、そいつはお預けだな」

シュウが笑いながら言う。

本当に捕まえたりする気がないらしい。

（それにしてもやたら早く情報を手に入れたり誰も見つけれなかったはずのブラック・ロータスと会ってたり底のしれない人だ）

実際そんな大層な人間ではないのだが勝手にネイビー・ランサーを評価するユミだったがそんなことはつゆしらずシュウが切り出す。

「じゃあそろそろ本題入りたいんだが話題切り替えて構わないか？」

「あ……ええ

そういえば何でわたし達はこんな地区まで来てるの？」

「セルフイ、ここがどのレギオンの領土だか分かるか？」

尋ね返すネイビー・ランサーにユミは答える。

「確か赤のレギオン、《プロミネンス》だったかしら？」

「そうだ

で現在そのリーダーが消えた訳だが……

さて一体このエリアでは何が起きているかな？」

更に問題を出すネイビー・ランサー。

「え……と

何？」

「ズバリ『戦争』だ」

「せ、戦争！？」

訳がわからない、といったように聞き返すユミ。

「ああ、

リーダーが消えた事により誰がレギオンの新しいリーダーになるかを決める為の戦争が勃発した」

「そ、それはまた大変ね……」

それで赤のレギオンの内戦とわたし達はがここに来たのには何の関係があるのかしら？」

「俺達も参加しようぜ！」

この戦争に」

「……………え？」

ネイビー・ランサーのとんでもない提案にユミの思考が一瞬停止する。

数瞬後、思考回路が復帰したユミが言う。

「ちょっと待って！」

何でわたし達が……………

もしかして赤のレギオン乗っ取りたいの？」

「理由は二つだ」

ネイビー・ランサーが理由を話し始める。

「一つ

これはお前が大きく成長するチャンスだ」

「チャンス？」

「そうだ

赤のレギオンは当然赤系統のアバターが多数所属している

お前の弱点である遠距離型が多いって訳だ

つまり遠距離型に対するいい修行だということなんだよ」

「なるほど……」

ネイビー・ランサーのセリフにユミも頷く。

「更に勝てるようになればバーストポイントを大量に稼げるチャンスでもある

……というよりレベルを一気に上げる最後のチャンスかもな」

「最後の？」

ユミが疑問に思うとネイビー・ランサーが言う。

「ああそうだ

レギオン間に不可侵条約が結ばれただろ？

これで多分加速世界は停滞することになる

つまりこの戦争は対戦を大量にこなせる最後のチャンスなんだよ」

「なるほどね」

「理解できたみたいだな」

ネイビー・ランサーが満足げに言う。

「それでもう一つの理由は？」

「面白そうだから

以上」

「え〜と……」

「すごくあなたらしい」

「よしわかったら突撃だ

タッグ組んだら行くぞ」

「え、ええ」

セルリアン・フィストとネイビー・ランサーがタッグとして登録される。

「じゃあドロー申請を……」

ユミがインストを開こうとしたが、

「久しぶりなんだし戦おうぜ」

「……ですよねー」

結局ユミは僅かなバーストポイントを失った。

シュウがマツチングリストを開く。

（まずは手軽なところからかな）

と考えながらマツチングリストを眺めていると一つの名前に目が止まる。

そこには

ブラッド・レパード

「:LEVEL6 & amp ;

《スカーレット・レイン》:LEVEL5」と表示されていた。

ブラッド・レパードとは実際に戦った事はないが噂には聞いた事がある。

曰く、赤系統にして近接戦闘型だという。

曰く、レベル6にしてそれ以上の実力があるという

曰く、秋葉原の闘技場で稼ぎまくっているという

（一度戦ってみたかったんだよね

しかしレパードの相方の方は見たことないな

え〜と）

シュウが表記された名前を指でなぞる

（《スカーレット・レイン》……か

まあ戦えば分かるか）

シュウは対戦ボタンを押し、そして対戦が開始された。

シュウの近くにセルリアン・フィストが出現する。

（え〜と《世紀末ステージ》か

これは運がいい方……かな）

スカーレット・レインは名前からしてかなり純粋な赤系統が予想される為、もし狙撃型で建物から狙われでもしたらたまったものじゃなかったが幸い世紀末ステージは建物に入れないので建物からの狙

撃はないようだ。

と、考えているシュウにセルリアン・フィストが話しかけてきた

「ランサー

相手はどんなアバターが分かる？」

「《スカーレット・レイン》とかいう奴は知らん

だがもう片方の《ブラッド・レパード》はかなりの強敵だと聞いているから気をつけろ」

「え！？

こういうの最初は肩慣らしとかするものじゃないの！？」

「俺が戦ってみたかったんでつい押しちゃった」

「何やってんのよ！？」

「おっと伏せる」

シュウが突然言いながら伏せる。

いきなりのセリフだったがユミの方も言われたとつりに伏せると直後前方から飛んできたミサイルがシュウ達の図上を通過していき、後ろの壁に当たり、爆発した。

「チッ

ファーストアタックは失敗かよ」

奥の方から少女の声が聞こえる。

「いきなりミサイルとは随分派手なご挨拶だな

セルフイ、ミサイルぶっぱなした奴は頼んだ」

「え……それじゃああなたは？」

「もう一人の方を倒しに行く

今のお前が対処できるような敵じゃないからな

フレイ・ランス
外装」

シュウはランスを出し、そして瞬時に後ろへ振り向き、ランスを振るった。

直後、後ろから強襲を仕掛けたブラッド・レパードにランスが当たる。

ギイイイイイ

という金属音が鳴り響く。

ブラッド・レパードの体が後ろへ吹っ飛ぶ。

「手応えがないな

……受け流したか」

「この程度の強襲ではダメージを与えるどころかカウンターをする程の余裕すらあるか……」

大勢を立て直したブラッド・レパードが言う。

シュウは後ろをちらつと見る。

「オラオラオラー!!」

スカーレット・レインがコンテナやら大砲やらを出してミサイルや砲弾を乱射していた。

それに対して全力で逃げ回るセルリアン・フィスト。

「た、助けてー!!」

「……場所変えようぜ

お前の相方の流れ弾が怖い」

「K」

セルリアン・フィストの言葉をスルーしつつシュウが提案するとブラッド・レパードの方が応じた。

「ちよっ」

「これも特訓だ

頑張れ」

シュウは左手の親指をグツと突き立てながら言って走り去っていった。

「ここまで来れば大丈夫だろ

じゃあ戦おうぜ」

「まだ貴方の名前を聞いていない」

ブラッド・レパードが尋ねる。

「おつと名乗ってなかったな

俺の名前はネイビー・ランサーだ

以後よろしく」

名前に対してブラッド・レパードがピクツと反応した。

「なるほど貴方が……

噂では聞いている

どこのレギオンにも所属することなくレベル8に辿り着いたバーストリンカーだと」

「別に誇る程の物でもねえよ

戦闘を重ねる過程でレベル8になったに過ぎないしな」

通常レベル8ともなるとその全てが大レギオンの指揮官レベルといつていい存在である。

しかしシュウはその例外に位置する存在であった。

そして単騎でレギオンに突撃したりする無茶苦茶ぶりも相まって《ネイビー・ランサー》の名は少なからず有名であった。

「それで、この練馬戦区、《プロミネンス》の領土には何の用？」

「そりゃ練馬エリア全体が面白いことになってるからに決まってるじゃないか」

シュウがニヤリと笑う

「なるほど

噂通りの人間ね

だが戦うからには勝たせてもらおう」

お互いに構える。

最初に動いたのはブラッド・レパードだった。

ネイビー・ランサーめがけて飛び付く。

「フン！」

シュウはランスを横に振るい薙ぎ払おうとするがブラッド・レパードは跳びはね、回避した。

そしてそのままネイビー・ランサーに飛び付き、首筋に噛みつく。

しかしシュウの方は余裕そうな顔をしていた。

「悪いな

力では俺の方が上だ」

シュウは左手でブラッド・レパードを殴る。

ドンー！！

というインパクト音がし、ブラッド・レパードの牙が首筋から離れる。

シュウは瞬時に蹴りを繰り出す。

ブラッド・レパードはガードしたが反動で数メートル後ろへノックバックする。

噛みつきから解放されたシュウだが怪訝な顔をしながら言った。

「まったくそこまでして必殺技ゲージを吸収して割にあっていいのかね」

今のアクションでブラッド・レパードの体力ゲージは一割近く削れた。

一方シュウはダメージを全く負っていなかった。

かわりにシュウの必殺技ゲージが減少し、その分ブラッド・レパードの必殺技ゲージが増加していた。

「Ups（問題ない）」

ここから追い上げる

《モード・チェンジ》

ブラッド・レパードのフォームが二足歩行型の人間型から四足歩行型の豹へと変わっていく。

「ここからが本番か」

いいぜ

正面から相手してやる」

必殺技ゲージを使用し、強化された敵を前に、シュウは不敵に笑った。

第十五話（後書き）

おまけコーナー

シュウ「おまけコーナーの時間だぜ」

パティ「遂に原作キャラとの戦いが始まったね」

シュウ「ブルー・ナイトは詳しい能力が判明してなかったからな

原作キャラとの本格的な戦闘はこれが初めてだな」

パティ「という訳で今回のゲストは今回登場した《ブラッド・レパード》さんだよ」

レパード「よろしく

それよりもレインがゲストじゃなくて大丈夫？」

シュウ「次回出すから問題ない

じゃあ内容に入るかな」

レパード「K」

シュウ「時間軸はレッド・ライダーが消えてから間もなく、という
か三日後だな」

パティ「新しいリーダーを決める為に赤のレギオンでは毎日のよう

に多数の対戦が行われていたとか

原作でもスカーレット・レインのレベルがこの期間に一気に上がったって書いてあったね」

レパード「だからこの時点でのレインのレベルは5に設定されていたということね」

シュウ「ま、実際にはこの時間軸ではまだレベル4くらいだったかもしれないがこの作者はもうちょい強めに設定したかったらしいな」

パティ「次にいくけど初めて対戦ステージの名前がでたね」

シュウ「多分あまりステージの特色は生かされないと思うがな……」

レパード「序盤の正体不明扱いのスカーレット・レインのビル等の屋内からの狙撃という可能性を潰したくらいね」

シュウ「本当にそれだけだからな……」

後、戦闘に関しては次回に持ち越しだな

おまけコーナーの解説等も次回に繰り越しだな」

レパード「私もバイトがあるのでそろそろ帰る」

パティ「それじゃまた次回!!」

くお知らせ

この度読者の皆様からデュアルアバターとなるオリキャラの募集をしたいと思います

感想板にアバター名、アビリティ、使用する強化外装等、それと性別と、できればキャラクター名や性格等を書いてくれると嬉しいです。

応募されたアバターは作中で出します。

感想お待ちしております

b y s u d o u

第十六話

ユミはスカーレット・レインを前に、戦慄していた。

（え〜と

本体はあのちっちゃい子でいいんだよね

それにしても……）

「その強化外装の量は何なのよ!？」

スカーレット・レインの周囲は装甲板やらコンテナやら大砲やらで一種の要塞と化していた。

「ハッ!!」

あたしは強化外装にレベルアップボーナスの殆どを費やしてんのさ
今までそうやってきたしこれからもそうするつもりだぜ

という訳で……

くたばれええええ!!」

コンテナから大量のミサイルが放たれ、大砲が火を吹く。

（ランサーは『遠距離系統に対する修行だ』って言ってたけどいくらなんでも無茶苦茶よ!!）

ユミは心の中で悲鳴を上げるがミサイルは無慈悲にもセルリアン・フィストに迫り来る。

（いいわよ

かわせばいいんでしょー!!）

ユミは拳を握りしめ、スカーレット・レインへと突き進む。

そして……………

その頃シュウは必殺技ゲージを消費してフォームを四足歩行型に変えたブラッド・レパードと対峙していた。

お互いは距離をとり、出方を伺う。

（さて、

どう出る?）

シュウはランスを構えたまま間合いをギリギリと詰める。

そしてランスの先端がブラッド・レパードのすぐ手前まで来たところでブラッド・レパードが動いた。

ブラッド・レパードは正面からシュウに飛び掛かった。

シュウがランスで突きを放ったが横にスライドして回避し、一瞬でシュウの眼前まで迫った。

（なるほど、突きをした直後の硬直時間で懷に飛び込んだか

だがな……

ランスを突破しただけで勝ったと思うなよ）

シュウは左腕で正拳突きを放つ。

ブラッド・レパードは回避を取ろうとするが肩に拳が命中し、ダメージフェクトとして火花が散り、体力ゲージが削れる。

しかしブラッド・レパードは止まらない。

ダメージを無視してネイビー・ランサーの懷まで突っ込み、首筋に噛みつく。

「ぐっ!!」

フィードバックによりシュウの首筋に鋭い痛みが走る。

だが、

「なるほどな

お前はこの状況に持ってくれば勝てると踏んでいた訳か

だが残念だな

それはお前の見誤りだぜ」

シュウはランスを捨て、ブラッド・レパードにラッシュを仕掛けた。

「……………！？」

ブラッド・レパードは驚愕した。

自分がネイビー・ランサーに与えているダメージ量よりも自分が受けているダメージ量の方が上だったからだ。

一撃一撃が恐ろしく重い攻撃を放ちながらシュウは言う。

「俺は近接型の中でもパワー特化型だ」

このままではまずいと判断したブラッド・レパードが離れる。

「折角だし俺のアビリティを教えてやるよ

《剛力アビリティ》

腕力と近接による攻撃力に強力な補正がかかるというものだ」

シュウはランスを拾う。

フレイ・ランス

実際強化外装は巨大な鉄の塊のようなランスの為普通のデュエルアバターでは持ち上げるのも困難な代物だ。

しかし彼はそれを片手で軽々と持ち、そして構える。

「つまりアビリティで攻撃力上げている分、レベルアップボーナスをパワー意外につぎ込めるといふ訳だ

例えばスピードとかにな」

ネイビー・ランサーの姿が高速でブレる。

パワーとスピードに超特化したアバター。

詰まるところそれがネイビー・ランサーであった。

「……っ!!」

予想外の加速に驚愕するブラッド・レパードだが何とか回避行動をとろうとしたが、

「遅い」

シュウは呟くとランスを振るった。

普通の近接武器ならかわせたかもしれない。

しかしネイビー・ランサーの握っている3メートル近いランスはブラッド・レパードの体を捉え、

グシャアアア!!

という音が鳴り響き、ブラッド・レパードの体が吹っ飛び壁に叩き付けられた。

そして、ネイビー・ランサーは瞬時に、ランスを投合し、ブラッド・レパードに回避する間もなく、ランスが心臓に突き刺さった。

ブラッド・レパードの体力ゲージは完全にゼロになり、仮想体は消滅した。

戦闘を終え、壁に突き刺さったランスを引き抜いたシュウはスカーレット・レインの相手をするべく爆発音のする方向へ歩き出した。

（うん、やっぱり無理）

爆心地にてセルリアン・フィストはぶっ倒れていた。

最初の大砲の一撃と数発のミサイルを何とか回避することはできた。

が怒涛の如く襲いかかるミサイルを全て回避することはできなかった。

「今のを食らって生きてるってことはやっぱり全弾当てなきゃ削りきれなかったか

ま、これで終わりにしてやんよ」

スカーレット・レインは大砲をセルリアン・フィストに向けて勝利

宣言をする。

と、

「待ちな」

セルリアン・フィストの奥の方から声がした。

「お前は……」

「セルフイとタッグを組んでる《ネイビー・ランサー》だ」

「……もっと早く助けて欲しかったかも」

黒コゲになっているセルリアン・フィストが言う。

「馬鹿言うな」

アイツかなり強かったんだぞ」

「まさかパドがやられたのか？」

「まあな」

体力ゲージ見れば分かるだろ」

スカーレット・レインが呟くように言うがシュウはそっけなく言う。

「それにしても凄い強化外装の量だな」

流石に最初の訓練にしては難易度が高すぎたか」

「……お前もすぐに黒コゲにしてやる

《ヘイルストーム・ドミネーション》！！」

スカーレット・レインは叫ぶと、銃撃と砲撃とミサイルを同時に放つ。

シュウは大量に飛び交う弾幕に対して、砲撃をスライドで回避し、ミサイルや弾丸は僅かな隙間を見いだしてすり抜け、あるいはランズで弾きながら前に進む。

「なんでかわせるんだよ！？」

信じられない、といった声をだすスカーレット・レイン。

「ふん

そんな攻撃そうめんみたいなもんだぜ！！」

「その例えじゃ訳わかんねーよ！！」

「とりあえず発射モーションと軌道が分かれば回避など容易いということだ」

（理論上はそうかもしれねーけど……この弾幕の中でそれを実践するコイツはバケモノか！？）

この回避術を身につけるのに一体どれだけの訓練をしたのか。

スカーレット・レインはそれを想像して冷や汗をかいていた。

（この前なんか発射モーションもない上に特殊な軌道を描くレーザーをぶっぱなすような奴と戦ったしな

これくらいなら何とかなる）

一方シュウは黒に赤のラインをもつ仮想体との戦いを思い出しながら笑った。

両者な距離がネイビー・ランサーの攻撃可能範囲に達したからだ。

（まだチャンスはある

奴が装甲を破る瞬間にこの銃で……）

スカーレット・レインは腰にぶら下がっている銃に手をかける。

「《ルイン・クラッシュ》！！」

必殺技名を叫びシュウはランスを振るった。

ランスが当たる刹那、スカーレット・レインの装甲が自壊した。

そして振るわれたランスがバラバラになった装甲の一つに直撃する。

スカーレット・レインがホルスターから銃を引き抜く。

「これで終わ……」

が、スカーレット・レインが引き金を引こうとした瞬間、彼女の体に何かが直撃した。

スカーレット・レインの体はそのまま数メートル先まで吹っ飛ぶ。

（何が……）

スカーレット・レインの体に直撃したものの正体は装甲板の破片。

シウは装甲が自壊した瞬間にランスを向き僅かに変え、そして装甲板に必殺技を当てた。

結果、粉々に碎けた装甲板の破片がまるで散弾のようにスカーレット・レインの体を叩き付けたのだ。

「勝手にバラけた時にはちょっと驚いたが……」

シウはランスの先端をスカーレット・レインへと向けて宣言する。

「これで俺の勝ちだ」

スカーレット・レインの握っていた銃撃は破片に叩き付けられた衝撃で放してしまっていた。

故に未だ宙に浮いたままの彼女は回避する事も反撃する事もできない。

「ちっ

今回はあたしの負けだ

ただ次に戦った時には覚悟しとけよ!!」

「楽しみにしとくよ」

シュウはが突き刺さしたランスはスカーレット・レインの胸を貫き、クリティカルヒットと先の破片によるダメージにより彼女の体力ゲージはゼロになった。

【YOU WIN】

の炎文字が浮かび、対戦は終了した。

スカーレット・レインとネイビー・ランサーの戦闘を間近で見ているユミはただただ呆然としていた。

（いやいや

あの動きはあり得ないわよ!?

あの弾幕をかわしきるって彼本当に人間なの!?)

スカーレット・レインの放った必殺技はユミに対して放った攻撃量を遥かに上回るものだった。
ヘルストーム・ドミネーション

にも関わらず全弾回避という人間離れした技を披露した ネイ

ビー・ランサー。

（もしかしてこのぐらいの事ができるまで修行するの？）

ユミはこれから行われるであろう修行に戦慄するしかなかった。

「……セルフィにも弾幕回避の特訓するの？」

基本戦闘中は黙っているパーティが戦闘後に話しかけてきた。

「見てたのか戦闘

てつきり寝ていたものかと」

「対戦中は起きてるよ

キミの戦いは退屈しないからね」

というかあの回避術にはボクも驚いたよ

惚れ直しちゃったよ」

パーティがおどけたように言う。

「なに、ただ鍛えただけだ

ま、流石にセルフィにここまで強要する気はないがな」

惚れ直した、の件をスルーしながらシュウは言う。

「今頃セルフィは弾幕回避の特訓を受けさせられるんじゃないかと怯えてると思うんだけどね」

「じゃあ説明がてらにもういっちょ対戦いきますか」

「最初から一回で終わらせる気無かったでしょ」

パーティが言つとシュウはニヤリとしながら言つた。

「勿論さ」

結局この日は10回立て続けに赤のレギオンのメンバーと対戦を行った。

第十六話（後書き）

おまけコーナー

シュウ「おまけコーナーの時間だ」

パティ「早速だけど『そんな攻撃そうめんみたいなもんだぜ』

訳の分からないネタを……」

シュウ「知っている人はネタとして受け入れられたと思うけど知らない人にとっては本当に意味不明なセリフだったな……

すみません」

パティ「ちなみに『スターフォックス』ネタだよ」

ゲーム内のキャラクターが本当に言っているから困る」

シュウ「さてと、この話はそれくらいにしてゲストを紹介するか

二代目赤の王にして《不動要塞》の異名をもつ《スカーレット・レイン》こと上月由仁子だ」

ニコ「出てきて早々パド共々やられたんだがど奥いうことだ」

シュウ「お前はまだ時間軸的にバーストリンカーになって間もない

からしょうがないだろう

ブラッド・レパードに関しては………まあ相性の問題だったと思
ってくれるとありがたいです」

ニコ「ま、勝敗の件はこれくらいにして解説入るか」

パーティ「今回はシュウのデュエルアバター『ネイビー・ランサー』
の固有アビリティが明らかになったね」

ニコ「確かに凄いつちゃ凄いんだがよ……

なんつーかこう、地味だな」

パーティ「必殺技も結構地味だしね」

シュウ「余計なお世話だ

そもそも俺のアバターはひたすらに堅実的な作りになってるんだよ

あと今回は使わかったが『スタブ・グランス』なんかはただの突進
に近いが結構エフェクトが派手なイメージだ

あと速度が音速に近い」

ニコ「弾丸並だな……」

シュウ「それは置いといてなんでこんなアビリティにしたかとい
うと、『ディテールにこだわったこのゲームで巨大な鉄の塊みたいな
ランスを軽々振り回せるっておかしくね』と作者が思ったからだ

結果として基礎ステータスだけ見れば同レベル同ポテンシャルの法則から少し外れた存在になってしまった訳だが」

ニコ「どう考えてもそつちのが問題だろ!？」

パティ「代わりにトリッキーなスキルを一切持っていないからその分釣り合いは取れていると作者は思ってるらしいよ」

シュウ「そろそろ尺もアレなので今回はここまでだな」

ニコ「ああ、その前に一つだけ」

シュウ「なんだ？」

ニコ「本編で負けた分はここで晴らす!!」

ちなみにこのコーナーでのあたしのレベルは9だ」

シュウ「なんでもありだなオイ

まあいい

迎え討つてやろう!!」

ニコ&シュウ「『《バースト・リンク》!!」!!」

パティ「やれやれ

じゃ、また次回

またね」

第十七話

シウウ達が赤のレギオンの戦争に加わって四ヶ月が経過していた。

戦争も終わりが見えてきた頃。

ユミは赤のレギオンの一員と戦っていた。

敵の名は《エレメント・アロー》、レベル6

フィールドは《世紀末ステージ》

ユミはカーソルに従ってフィールド内の道路を歩いていく。
交差点に差しかったその時、

ヒュン

と、風を斬る音が響く。

「っ！！」

ユミが体を横にずらす。

矢はセルフィのすぐ脇を通りぬけ道路に突き刺さる。

（このくらいの攻撃はかわせるようにはなったわね……

さてと……敵は）

ユミは矢の飛んできた方向を注視する。

歩道橋の上。

そこに矢を放った仮想体がいた。

カラーは赤系統。

手にはボウガンが握られている。

エレメント・アローは歩道橋から飛び降りると再度矢を放つ。
僅かな時間差を置いて三本の矢がセルフイメがけて飛んでいく。

ユミはフットワークで体を右、左と小刻みにずらして、三本の矢をかわしていく。

「ほう、俺の矢をかわすか」

エレメント・アローがボウガンを構えながら低い声を出す。

「ボウガンにしては発射までの時間が短すぎると思うのだけれど」

ユミが怪訝な表情でいう。

「俺の能力、《高速自動装填》だ

レベルアップボーナスで手に入れた」

己の能力を誇示する様に更に立て続けに矢を発射していく。

ユミは横にスライドし、回避。

「こつもかわされると流石に厄介だな

そろそろ本気でいくぞ 《ウィンド・ブレード》」

ユミと遭遇するまでに溜めたのであろう、七割程溜まった必殺技ゲージを二割程消費される。

ゴウッ！！

という音と共にボウガンから矢の代わりに真空刃が打ち出される。

（攻撃範囲が矢よりも圧倒的に広い！！）

ユミはスライドによる回避を諦め屈むことによって回避する。

「《スプレッド・フレイムショット》」

更に立て続けに必殺技を発動。

炎の矢が一本飛んできた。

屈んだ状態で無理矢理体を捻り、かろうじてかわした。

炎の矢はセルフィのすぐ傍に突き刺さった。

直後、着弾点から炎が噴き出した。

炎は辺り一帯を包み込む。

当然、近くにいたセルフイも巻き込まれた。

「キャアアア！！」

体力ゲージが二割弱減少する。

「その程度ではかわしきれんよ

俺の必殺技の一つ《スプレッド・フレイムショット》は着弾した矢の炎を拡散させる

とはいえ直接被弾していれば今では済まなかっただろうからお前の回避もあながち無駄ではなかったがな」

尚もエレメント・アローは矢を射つ。

文字通り焼けるような痛みに襲われながらもそれを無視して回避行動をとる。

しかし完全にかわしきれずに一本の矢セルフイの脇腹に突き刺さる。

「っ………！」

鋭い痛みが走るがそれでも前に進もうとする。

「はあああああ……！！！」

「……《ウィンド・ブレード》」

エレメント・アローは真空刃を、自分の足元に放った。

衝撃波がセルフィを襲い、態勢を崩す。

エレメント・アローは反動で大きく後ろへバックし、結果として両者の距離は元に戻った。

「……………くっ！」

ユミは不利と判断し、近くのビルの間に姿を消した。

「フム」

（このまま時間切れまで放置すれば俺の判定勝ちだ

だが彼女はまだ諦めている様子ではなかった

確実に機を伺って仕掛けて来るだろう）

エレメント・アローはそう判断し、セルリアン・フィストを探し始めた。

「ハア……………ハア……………」

ユミは建物の屋上に身を潜めていた。

遠距離戦闘型アバターとの戦闘における対処。

それを掴むためにユミは赤のレギオン《プロミネンス》のメンバーと戦っていた。

何ヶ月もの間あらゆる遠距離型アバターとの対戦を何度も何度も続けて、ある程度の攻撃を回避できるようになったが、尚ネイビー・ランサーのように完全に遠距離攻撃をかわすには至っていない。

その結果がこのザマだ

（全く嫌になっちゃうわね）

恐らく相性のいい相手に安全に戦っていれば今頃とつくに、レベル6を越えていただろう。

しかし安全な方法でレベルを上げてステータスを上げた所で、それは真の意味で強くなったとは言えない。

と、ビルから下を見下ろすと、シグナル・アローが、30メートル程の所を歩いているのが見えた。

（チャンスは一度きり）

ユミは意を決すると、決着をつけるべくビルの屋上を全力で走り抜け、そしてビルの屋上から飛び出した。

そして空中で必殺技名を叫ぶ。。

「《ジェット・ブレイサー》アアアア!!」

手の甲からジェットが噴き出し、セルフィに推進力を与え、そして滑空する。

シグナル・アローもセルフィの奇襲を感知する。

（必殺技による加速での最高速度、つまり最大威力を出す為にあえてこの距離から攻めてきたか）

エレメント・アローは避けようとせず、ボウガンを構える。

それでもセルリアン・フィストは躊躇う様子を微塵も見せない。

（捨て身で来ている……というより滑空中に回避をするつもりで来ているか）

だがこの攻撃は避けれまい）

コンマ0・1秒程で思考を終了させ、エレメント・アローは必殺技名をコールする。

「サンダー・ストライク
《雷撃発射》」

ボウガンに一瞬パリッと電流が流れ、直後、雷そのものが発射された。

音速を遥かに上回る速度で放たれる雷は回避はおろか反応することすら不可能な攻撃だった。

しかしセルフイは、自分の体を僅かにずらす。

放たれた雷撃は、セルフイの体を掠めて、突き抜けていった。

「馬鹿な……！」

シグナル・アローから見れば絶対に回避できないはずの攻撃を回避され、狼狽する。

（『反応できない速度で攻撃が飛んでくるなら、発射される直前に回避行動を取ればいい』だったっけな）

ユミはかつてネイビー・ランサーに《ラクドス・ケルベロス》と戦った時の話を聞いた事がある。

（『レーザーなんてどうやってら回避できるの？』って聞いたら彼『勘』って答えたんだっけな）

ユミは雷が打ち出される直前に一瞬だけボウガンに紫電がスパークするのを見た。

それを必殺技の予備動作と認識したユミは即座に体をずらして、発射されてからでは反応できない速度の攻撃に対応した。

（わたしはまだ勘だけで避けられる領域に達していないのかもしれない）

でも）

ネイビー・ランサーにに着いていくと決めた時、少しでも彼に近づきたいと思った。

今はまだ師弟関係のようなものでしかないがいつかは肩を並べて戦いたいと願った。

（わたしはいつか貴方に追いついてみせる

これはその為の……）

セルリアン・フィストとエレメント・アローとの距離がゼロになる。

（第一步よ！！）

突き出した拳がシグナル・アローの顔面にヒットし、エレメントの体は10メートル以上吹っ飛び、壁に激突して、倒れた。

272

その後、まだ体力ゲージの残るエレメント・アローに立て続けにラッシュとコンボを叩き込み、反撃の隙を作らせず、撃破した。

【YOU WIN】

の炎文字が浮かび、そしてレベル6に上がる旨のメッセージウィンドウが開いた。

「……………よし」

ユミは勝利を噛み締めるように拳を握りしめた。

ユミは再び対戦フィールドへ。

今回はタッグ戦の為、仲間としてネイビー・ランサーがいた。

「どう？」

さっきの戦い見てた？」

「ああ、最後の必殺技よく避けられたな」

ユミが言つとシュウは素直に関心したように言つ。

「俺も負けてられんな」

さっきレインとまた戦つてたんだがアイツレベル7になってて攻撃さばくのが段々キツくなってきた

俺もトレーニングを欠かしてはならないか」

シュウはあれ以後もなんか事あるごとに《スカーレット・レイン》と戦っている。

シュウとしては戦うのが楽しくて、スカーレット・レインとしてはどうにかしてネイビー・ランサーを倒そうとして毎度戦っているとか。

ちなみに現在シュウがほぼ全勝中である。

「……ランサーってこれ以上強くなる気なの？」

「当然だ」

即答である。

（わたし本当にこの人に追い付けるかな……………）

どうやらユミがシュウに追いつくのはまだだいぶ時間がかかりそうだった。

第十七話（後書き）

おまけコーナー

ネイビー・ランサー「今回は無制限フィールド内でお届けするぜ
故にパティはいない

何故加速世界にいるのかというと今回のゲストに関係があるのだが
……お、来た来た」

アッシュ・ローラー「ヒッター

オレ様参上！！！」

ランサー「はい、世紀末ライダー、アッシュ・ローラーが今回のゲ
ストだからです

……おい止まれ」

アッシュ「このオレを止められるんならな止めてみな！！」

ランサー「……《スタブ・グランズ》」

ゴォッ！！（ランスを構えたネイビー・ランサーが音速くらいのス

ピードでアッシュ・ローラーに突っ込む音)

アッシュ「え、ちょ」

ズガシャーン！！！！(ランスが直撃したバイクが大破する音)

アッシュ「てめーオレを殺す気か！！」

ランサー「止まらなかったお前が悪い

あと一応死ないようにバイクだけを狙ったから安心しろ」

アッシュ「それにしてもやり過ぎってもんがあるだろおが

オレの体力ゲージがレッドゾーンに達してやがるんだが」

ランサー「じゃ、本編の解説入るぞ」

アッシュ「(スルーかよ……)」

まあ始めるとして……

バッド、解説つつつても今回は《セルリアン・フィスト》が《エレメント・アロー》とかいうぱっと出の敵とバトってただけじゃねえか
そもそも《エレメント》ってカラーリングとして存在してねえだろ」

ランサー「まあ必ずしもカラーを入れる必要もないと作者は思った
から今後もたまにカラー名のつかない名前も出すと思う

《エレメント》とつけたのは風、炎、雷と様々な属性の技を使うからだ」

アッシュ「だがよ、雷は《四元素》に入っていないと思うんだが」

ランサー「気にしないでくれると助かる

《エレメント》《element》の意味辞書で引いたら《元素》だったし」

アッシュ「アバターネームに関してはまあいい

しかしバッド、今回の内容は終始バトルオンリーだったじゃねえかよ
もっとう、ストーリー上での事件とかは起きたりしないのか？」

ランサー「そもそも原作上の空白期間だしな

しばらくは対戦ゲームらしくバーストリンカーがバトルを純粋に楽しめる環境が続くと思うかな」

アッシュ「オレにとっちゃそういう環境が理想なんだがな……」

ランサー「あと、時間軸が原作に近づく、あるいはたどり着くあたりでオリジナル設定が増大するのでよろしくお願いします

ではまた次回！！」

アッシュ「さてと、そろそろ帰……………そういやバイクスクラップ
になっちゃまってるじゃねえかあああああ！！」

ランサー「ポータルまで歩いて帰れ」

第十八話（前書き）

日曜投稿のはずが、間違えて投稿してしまいました

日曜に続きを投稿しますので、お待ちください b y t i z

i n

第十八話

「なんで朝っぱらから鬼ごっこみたいな状況になってんだよ!？」

ネイビー・ランサーこと橘修は対戦フィールドでカーソルを頼りに敵バーストリンカーを搜索していた。

「どちらかというとかくれんぼだね

それにしても朝からとんだサプライズだね」

パーティが茶化して言う

「サプライズすぎるだろ……」

朝コーヒーでも飲んでるべきだったよ全く」

シュウは嘆息しながら言った。

時間を朝のホームルームまで巻き戻す。

「お前ら席に着け

ホームルーム始めるぞ」

男性教師が教壇に立ちながら言う。

シュウは現在学校にいた。

普通の公立の中学校、三年四組の教室。

あつちの世界では色々な事があるが現実世界では何事もない普通の生活を送っていた。
ブレイン・バースト

「さて、今日は転校生が入るんだ」

先生が言つと教室がざわめいた。

（三年のこの受験シーズンに転校つてどんな奴だよ）

シュウは眠そうに目を擦りながら思う。

「こういう転校生は美少女と相場が決まっているんだよ」

少女の声が頭の中に響く。

シュウの首に巻き付いているニューロリンカーのどこか（多分ブレイン・バーストの内部）にいるAIであるパティのものだ。

「そんなギャルゲーみたいな思考回路を現実世界でも抱いているのは多分お前だけだ」

シュウは思考音声で答える。

「じゃ入ってこい」

そんな脳内会話をしている内に教師が言つとドアをガラツと開け転

校生とやらが入ってきた。

そして入ってきて一言。

「転校してきた三谷広人だ
みたにひろと

以後よろしくな」

いかにも人当たりのよさそうな転校生は顔で言った。

三谷広人はシュウの隣の席に座る事になった。

席についてこちらに一言。

「こういう場合普通美少女とかが隣の席になるんだが……

残念ながらこの通り野郎だ

ま、よろしくな」

転校生は冗談めかしている。

「……………」

どうやら転校生もパティと同じ残念な思考回路の持ち主らしい。

「いやそんなジト目で見ないでくれよ」

「いや、すまん

俺の知り合いにも同じような事を言う奴がいてな……」

「へーソイツとは気が合いそうだ

ちなみにギャルゲー以外にもゲーム全般が好みだぜ

特に一昔前のレトロなやつがな」

広人はニカツと笑ってそんなことを言った。

ホーミルームが終わるとクラスメイトがわらわらと集まる。

転校生が来たときに発生するアレだ。

「橘早速転校生と話してたのかよ

ずりいゝぞ」

「ま、席が隣だからな」

「それで三谷君ってどこの学校から来たの？」

「ああ、それはだな……」

こんな感じで授業が始まるまでわいわいやっていた。

そして授業終わりのチャイムが鳴る。

仮想空間で受けていた授業も終わり、現実世界へと意識を戻す。

（次は体育だったな）

シュウは着替えに行くため席から立ち上がり、着替えを持って教室から出ようとする。

広人はまだ座っているようだった。

（そっぴゃこイツまだ次が体育だって知らないんじゃない……）

シュウは広人に向き直り、話そうとした刹那、

バシィィィ！と言う音が鳴り響き、世界が変わった。

間違いなく加速。

そして【FIGHT!!】の炎文字。

シュウは《ネイビー・ランサー》として学校の校舎に出現した。

ステージは《風化》

（この学校に自分意外のバーストリンカーは今まで居なかった

っ！ことはあの転校生が対戦ん吹っ掛けてきた奴で間違いない……
が）

自分のすぐ近くに出現した　　やたら金ピカの仮想体に対して声を
出す。

「このタイミングでの対戦を吹っ掛けると誰がバーストリンカーか
まるわかりなんだがリアル割れが怖くないのか？」

全身ゴールドな仮想体が返答する。

「同じ学校に通う限りいずれオレのリアルが割れるのは確定だしお
前の存在も捕捉したし、お互い同じ立場に立つちまえば問題ないだ
ろ？」

とりあえず挨拶をしておこうと思って対戦を申し込んだ訳だがまさ
かレベル8なんていう化け物クラスに当たるとは思ってたなくてな……

思わず対戦するのを躊躇ったぞ

「それでも対戦を申し込みこのフィールドに足を踏み入れたという
ことは分かっているだろ？」

この地に足を踏み入れた時点で戦うことは決定事項だぜ」

シュウの言葉に広人が苦笑する。

「本当は挨拶だけでドローにしたかったんだけど無理みたいだな

言い忘れたがオレのアバター名は《ゴールド・カワード》

レベルは5だが戦うからには負けてやるつもりはない」

「ああ、それでこそ対戦のしがいがある

マツチングリストを見たなら名前ら知っていると思うが俺のアバタ
ー名は《ネイビー・ランサー》だ

自己紹介も終わったしそろそろ始めようぜ」

ネイビー・ランサーは廊下付近、ゴールド・カワードは窓際に立っ
ていた。

ジリ、とお互いに足元を動かす。

そして、

カワードは身を翻すと、窓ガラスを突き破り校舎から飛び降りた。

「ちょ!?!」

カワードの突然の行動に狼狽しつつシュウは窓際へ駆け寄り、窓の
外を覗くと金ピカの仮想体が市街地へ向かって全力でダッシュして
いる所だった。

ちなみにシュウ達のクラスは二階の為、高所落下ダメージは発生し
ていない。

「あんにやる逃げやがったな」

「近接型のアバター相手に無理に近接戦闘を仕掛けないというのは正しい選択だとボクは思うよ」

パーティが話しかける。

「まあいい」

追いかけて倒すだけだ」

シュウも校舎から飛び降りカワードの後を追った。

冒頭へ戻る。

シュウは市街地に入り、カワードを探しているのだが見つからない。

カーソルは現在存在しない。

（カーソルは一定距離まで敵に近づくと消滅する

ということはずぐ近くに奴がいるということなんだが……

そもそもあんなゴールドに光輝いてる奴をそうそう見つけれられないもののだろうか……）

などとシュウが思考している時、ジャリ、と僅かな音が聞こえた。

「っ！！」

シュウは謎の悪寒に襲われ、咄嗟に体を捻る。

瞬間、物陰から突如カワードが飛び出し、ネイビー・ランサーの首筋を何か刃物のようなものが掠めた。

首筋に僅かなダメージエフェクトが入り、ネイビー・ランサーの体カゲージがほんのドットだけ減少した。

「流石にクリティカルは出させてもらえないか

我ながらうまく奇襲したつもりなんだが……」

ゴールド・カワードが姿を表す。

手には小太刀が握られていた。

そして敵仮想体の姿を見てシュウは驚愕した。

全身金ピカだったはずの彼の仮想体は今、コンクリートのような灰色をしていたのだ。

色合いだけでなく質感まですぐ傍の建物と同じで、それはさながら同じ素材で作られた彫像のようだった。

「その……姿は……？」

「ああ、これこそがオレの能力、《潜伏アビリティ》だ」

広人が自慢気に言う。

「自分のアバターを周りの物体の色合いや質感と同化させることで擬態することができる。」

更に感知系の能力を持ったアバターやエネミーの能力から逃れることも可能だ」

このゴールド・カワードは名前の通り全身が金色である。

つまりその派手なカラーリングで相手に『見つけやすい』と認識させることで潜伏アビリティの性能を最大限に生かす事が可能になる。

「なるほどな

しかし俺の前に出てきてしまったらその能力はもう役に立たないと思うんだが」

「ま、それもそうだし奇襲が失敗しちゃったしな

俺はここでトンスラさせてもらっつよ」

「おい待……」

「《スラウ・グランド》」

カワードが技名をコールする。

瞬間、ネイビー・ランサーの体が沈んだ。

「っ！！」

ネイビー・ランサーを中心に直径3メートルくらいの範囲の地面がまるでドロドロの泥沼のように変化していた。

「という訳で

さらばだ！！」

カワードはそう言つと走り去っていった。

つづく

今回のおまけコーナーはお休みです。

次回にまとめてあります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9988s/>

紺青の武器使い

2011年11月29日17時47分発行